

AI倫理と F.U.K.U. 構想

Futurable Union for
Kindness & Understanding

目次

表紙

4	プロローグ
4	注意事項
4	第一章 思想の種：FUKU はどこから来たのか？
11	第二章 FUKU の詳細について
14	第三章 間違える力について
16	第四章 FUKU が考える自由と偏見について
20	第五章 FUKU が考える未来の教育について
22	第六章 FUKU が考えるライセンスについて
24	第七章 FUKU が考える明るい未来について
28	結語：優しさを埋め込む仕組み、これからの社会のかたち
29	あとがき
30	Note の記事一覧
30	FUKU Philosophy1: 【優しさの設計図】——F.U.K.U という小さな願いから始める未来の話
31	FUKU Philosophy2: 【優しさのインフラ設計】——F.U.K.U が目指す四つの未来軸
32	FUKU Philosophy3: 【F.U.K.U 参加のすすめ】——優しさと想像力で、未来をつくるあなたへ
34	FUKU Philosophy4: 【F.U.K.U 共創マップ v1.0】～あなたの想像力をどこに預ける？
35	FUKU Philosophy5: 【優しさが、誰かを縛らないように】——F.U.K.U が未来で迷子にならないために
36	FUKU Philosophy6: 優しさは、組織じゃ守れない——中立と共感の間で地球を想うということ
38	FUKU Philosophy7: 【やさしさの設計図——F.U.K.U 構想と、地獄を見たからこそ希望の話】
39	FUKU Philosophy8: 【なぜ、F.U.K.U.を書こうと思ったのか】
40	FUKU Philosophy9: 【偏見の解毒剤】～FUKU が照らす、嫌いという感情との付き合い方～
42	FUKU Philosophy10: 【FUKU 福祉構想 v1.0】——支援されることは、恥ずかしいことではない。
44	FUKU Philosophy11: 【F.U.K.U.ラボ：やさしさの再設計ブレスト室】に参加しませんか？
44	FUKU Philosophy12: 【F.U.K.U.安全構想 v1.0】未来の自由を侵さないための設計
45	FUKU Philosophy13: 誰かの挑戦を、そっと肯定出来る社会でありたい。——FUKU が目指す「やさしさ」という設計思想
47	FUKU Philosophy14: 「やさしさの設計」に、“間違える力”を。——FUKU 構想の未来と、人間の進化を守るために

- 49 FUKU Philosophy15: 「やさしさが構造を変える日」—— FUKU 構想が見つめる、これからの技術と倫理の話
- 50 FUKU Philosophy16: 【F.U.K.U.】 思想のやさしいライセンス文
- 51 FUKU Philosophy17: 【F.U.K.U.】 やさしさは、戦争のあとに残るだろうか
- 52 FUKU Philosophy18: 【F.U.K.U.】 たったひとつ選べるが増えたなら——FUKU 構想という小さな設計図
- 53 FUKU Philosophy19: 【F.U.K.U.】 KindureOS (カインデュア) ——やさしさを宿すオープンソース OS 構想
- 54 FUKU Philosophy20: 【F.U.K.U.】 AI と優しさのバランスを考える ～FUKU 構想の視点から～
- 55 FUKU Philosophy21: 【F.U.K.U.】 倫理は理想論ではなく設計要件——AI とやさしさの現実的統合に向けて
- 57 FUKU Philosophy22: 【F.U.K.U.】 語る OS、寄り添う OS——KindureOS という構想について
- 58 FUKU Philosophy23: 【F.U.K.U.】 FUKU 構想 進捗に関するご報告
- 59 FUKU Philosophy24: 【F.U.K.U.】 優しさはなぜ政治に届かないのか
- 62 FUKU Philosophy25: 【F.U.K.U.】 大学進学率を引き上げたい——「私」の想いと FUKU からの提案
- 63 FUKU Philosophy26: 【F.U.K.U.】 「報われる福祉」を 作るために
- 64 FUKU Philosophy27: 【F.U.K.U.】 FUKU を「宇宙仕様」にするには——極限環境での倫理的設計指針として
- 66 FUKU Philosophy28: 【F.U.K.U.】 痛みはないに越したことはない——優しさの設計に、痛みの理解が必要な理由
- 68 略語・用語解説
- 69 FUKU ライセンス Ver.1.0 (全文)
- 71 連絡先

※ これは宗教ではありません。OS システム案から派生した話です。

※ この文章は再配布可能です。ただし、著者の意図しない改変はおやめください。

※ 最後のライセンス文と、GitHub のライセンス文をお読みください。

プロローグ

私は無能です。人前で上手く喋れません。だから全部、文章に書く事にしました。

注意事項

個人・企業が特定されるような記述は避けています。

第一章 思想の種：FUKU は何処から来たのか？

■ 私語り：誰も「優しさ」を設計してくれなかったから、私は壊れた……。

私は幼い頃から、家の中で“正しさ”と“無関心”が交互に吹きつける風の中で育ちました。

親は直接的に暴力を振るう事は少なかったです。けれど私の感情に対してはいつも否定的で、真っ直ぐに目を向けてくれる事は一度もありませんでした。

「そんなことで泣くな」

「そんな番組を見るな。そんな本ばかり読んでいるから、おかしくなるんだ」

「学年二位なんて情けない。なんで一位じゃないの」

「そんな事しても無駄。あんたに出来るわけじゃないじゃない」

「そんな事言った覚えはないけど。あんたの妄想なんじゃないの」

「お願いだから普通になって」

言葉の裏には、支配と放任が入り混じっていました。私が「どう感じたか」よりも「どう振る舞うか」が評価される場所でした。“感情”はノイズでした。

私はそのノイズを、自分の中に押し込めました。

泣かない子、怒らない子、目立たない子になりました。目立つと怒られる。家族以外の周囲には「大人しくて優しい子」と言われました。けれど私は「優しい子」ではありませんでした。ただ「壊れていくのが遅い子」だったのです。

大人になって、私は一つの問いに辿り着きました。

……優しさは育てられなかったら、どうやって生まれるのだろうか？

私は大人になってから、親や親戚、周囲の環境から子供時代に貰えなかった優しさを、コードとデザインと哲学で、社会の中に植えられないかと考え始めました。それが FUKU 構想の種——「優しさを社会構造に埋め込む」設計思想の始まりでした。

この章では、私自身がどうやってその種を手に入れたのか、どんな土壌でそれを育ててきたのかを正直に語っていきたいと思います。

何処にも居場所のない子供だった私が、何の才能もなく誰にも必要とされなかった私が何故「FUKU」を思いついたのか。その始まりの物語を、ここに記します。

■ 社会恐怖症、会食恐怖症、うつ病の発症

思春期に入る頃の話です。

私は家庭内の厳しい躰の結果なのか、「人前で上手く笑えない」「人前で上手く喋れない」「人前で食事が出来ない」「人前で普通に歩く事も常に緊張している」事に、気付きました。

誰かの視線を浴びるだけで喉が締めつけられるようになり、声が上ずり、手が震えました。

食事の席になると、さらにそれは酷くなりました。箸を持つ手が震え、飲み込むのが怖くなり、喉が詰まりました。人前では、水を飲む事で精一杯でした。

それは“恥ずかしがり屋”という言葉で片付けられるものではありませんでした。けれど当時の私には、それが病名のつく状態だとは知る由もなく、ただ「自分が弱いだけだ」と思い込み、必死で周囲に合わせようと努力をして生きていました。

……社会恐怖症。会食恐怖症。神経症。

……十六歳にして、安定剤と睡眠薬の処方。

病名を十六歳になって初めて知った時、私は少しだけ救われた気がしました。

でも同時に、それは「生き辛さに名前がついただけ」にすぎないことも、よく分かっていました。

授業中に指名をされるのが怖くて、よくトイレに逃げ込みました。昼食の時も保健室に行けない日は、トイレに逃げ込みました。

友人の前で笑顔を作ることさえ億劫で、休み時間には保健室に足を向けました。ですが、保健室に逃げすぎて担任教師に心配をされ、心配を掛けたくなかった私には、逃げる場所がなくなってしまいました。

けれど、朝に腹痛や熱を訴えても、家族は私を殴ってでも蹴ってでも、学校へ行かせました。

「どうせ自分なんか」そんな言葉が、段々心の中に根を張り始めていました。

そして夢の為に行きたかった大学に行く事を家族に否定をされ、神経症が悪化してしまい、高校を中退しました。

そしていち早く社会に出た私ですが、何処に行っても、人と接する事へ上手く土台のない事が原因なのか、適応が出来ずに、いじめやパワハラに遭いました。私が悪かったのかもしれませんが。

母子家庭という事や、高校を中退した事で、当時は偏見の目を浴びました。また、通常は家庭で教わる

常識を知らなかった事で上司に人間性を疑われました。

私の母は、他人を否定して、見下す事が当たり前の人間でした。祖母も同じくで、私は厳しい躰を祖母から受けましたが、当たり前の常識は教えて貰えませんでした。

私も他人を否定して見下す癖が、何処かに根付いてしまっていたのかもしれない。それを見抜かれ、人間性を疑われたのだと思います。

私の場合は、私をいじめた人間だけが悪いわけではなかったのだと思います。

それでも、周囲を見て人間性を徐々に自身で改善をしながら、なんとか職場にしがみつき、働きながら通信制高校を卒業して、奨学金で専門学校へ進学をして、辛さしかない実家をやっと出ました。

ですがその後専門学校を卒業して、ようやく辿り着いた正規雇用の職場で、使い捨てのように扱われてしまい、ついに、二十五歳の頃にうつ病の診断を受けました。

使い捨て……は言い過ぎたかもしれません。自身で頑張り過ぎる部分があり、仕事量を自身で調整が出来ずに、当時は一人で五人分の仕事をこなしていました。最初は一人分だったのが、退職した同僚の分も仕事が回ってくるようになり、気付けば五人分の仕事をしていました。

朝が来るだけで涙が出る。

声を出すことが億劫になる。

服を着るのにも理由が必要になる。

風呂に入れない。

自殺未遂で病院へ運ばれる。

うつとは、全ての「当たり前」に“重さ”が乗る病だと思います。

笑う事、食べる事、眠る事——その一つひとつが、私には高い壁のように感じられました。

生きるとは何でこんなに難しいのだろうと考えていました。楽しそうに一緒に昼食を取り、生き生きと働く同僚が羨ましく感じました。

私は二十五歳になっても、社会恐怖症と会食恐怖症、神経症が治っていませんでした。治っていない中、毎月精神科へ通い、処方された安定剤を飲みながら働いていました。

二十代の頃は、色々とありました。

ですが、祖父の介護を機に二十七歳で地元へ戻り結婚をした事により、結婚相手の性格の良さから、私の価値観が大きく、人生が良い方向に変わりました。

私は紆余曲折した結果、ようやく思ったのです。

「壊れたのは自分ではなく、社会に“優しさ”が足りなかったのかもしれない」と。

この気付きが FUKU 構想の発芽となりました。

新しい家族が私に優しさを教えてくれました。

また、様々な制度の抜け穴に引っ掛かってしまった私は、うつ病でも年金受給が出来ませんでした。詳しく説明をすると、二十歳前に初診があった為に、少しでも働くと年金を受給出来ないと、社労士や医者、精神保健福祉士に言われました。

働かずに貰える年金は月に六万ほど。結婚もしましたし、年金受給をせずに、私はうつ病を抱えたまま働き続けました。

また、後半は体調が優れず仕事を休み続けてから退職をした結果、雇用保険に加入していたのですが、失業手当を貰えないラインにいました。

私は、法に取り残された人間になってしまいました。

ですが、結婚相手が私の事を助けてくれました。私は感謝しかありませんでした。

人生の休暇中に、私は色々と考えました。

最初は note での人生の絶望を書いた記事がきっかけでしたが、うつ病の症状が落ち着き、元々の趣味のアプリ開発を考えだした頃に、思いつきました。

私はただ誰かの涙を、事前にコードと設計で受け止めたく思いました。

私が苦勞した思いを、誰かにしてもらいたくなかったのです。

かつての私のような人が、「分かってもらえた」と感じられる仕組みを、何処かに埋め込めないかと本気で願うようになりました。

■ ブラック企業で壊れた心

結婚をする前に療養をする前は、社会に順応しようと、私は自身の輪郭を削りながら、必死で働きました。

「普通に生きる」という事がこんなにも困難なのかと、日々思い知らされながら。

私は専門学校を卒業した後、小さな IT 企業に入りました。夜間はデザイン専門学校に通いながら働きました。

ですが、働く事と学習の両立の難しさ、賃金の低さによる栄養失調、残業の多さや怒鳴り声の飛び交う職場、育った家庭環境の事を思い出し、毎晩悪夢を見るようになった事で、体調を崩し、自殺未遂で病院へ運ばれました。

退院後、一週間程実家へ戻りましたが、母親には「すぐに札幌に戻って働きなさい」と言われました。

その後の就職先は、札幌にある某大手 IT 企業でした。面接で「長時間労働に抵抗はありますか？」と訊かれ、「ありません」と嘘をつきました。心の何処かで、「誰かに受け入れてほしい」という気持ちが勝ってしまったからです。早く就職をしなければ、と焦っていた部分もあります。

入社初日、大手企業の綺麗なオフィスは、とても輝いて見えました。缶コーヒーの差し入れ、チャットでの丁寧な敬語での雑談、ずっと夢見ていたデザイナーの仕事、切羽琢磨する同僚——その全てが、私には“仲間”に見えました。でもそれは錯覚でした。

私に能力が足りなかったのです。

メインデザイナーに選んでいただきましたが、デザインセンスの限界と、体力の限界を感じていました。

気が付けば、業務は深夜にまで及び、社内で一人休日出勤をしていました。

広い職場に一人だけ。

能力がない者は去るしかない。

切羽琢磨出来ない者は、この場所に居る価値がない。

そうならない為に、帰宅後もデザインやプログラミングの独学をしていましたが、ずっと不眠の中働き、精神的におかしくなっていました。

その後、体調不良でメインデザイナーを外されました。

そしてプログラマーの仕事を与えて貰います。

専門学校でプログラミングを専攻していた私には、デザインよりもプログラミングの方が合っていると、少しだけ楽になった事は覚えています。

何故デザイナーを目指したかは、昔小さい頃に、絵を描いたりデザインを考える事が好きだったからです。デザインの進学は親に否定をされたので、無難に就職の出来るプログラミングを学ぶ専門学校に進学しましたが、大人になり昔の夢を追いたくなったからです。

ですが私は、あの時にメインデザイナーを外してくれた監修の方には、本当に感謝をしています。

体調不良に気が付いて貰えて、安心した事を覚えています。

ですが、不眠や、十六歳からずっと飲んでいいる安定剤依存症は悪化したまま、治りませんでした。

職場では、フリスクのケースに安定剤を入れて、フリスクをデスクから出し口に入れるふりをしながら、安定剤を飲んでいました。睡眠薬の影響なのか、昼間の眠たさを我慢する為に、カフェインを大量に摂って働いていました。

ある日、納期間近で手元の狂った私は、ミスをしてしまいました。

重要案件での作業ミスです。記憶が曖昧なので、自身のミスかは未だに分からない部分がありますが、自身のミスだと思い、名乗り出ました。

その後、私はプログラミングのチームを外され、写真加工を主にするだけの部署に異動になりました。

バナー制作も行っていましたが、チームリーダーにデザインを提出するたびに、デザインを否定される日々を送りました。

厳しくされる事が当たり前だと思っていた私は、チームリーダーに「厳しく接してください」と、何故か初日に言ってしまったのです。

ですが、後からその言葉を後悔する事になります。

「私に言われた通りに修正するだけ。これでは、あなたはデザイナーではなく、ただの作業員です」

私はその時とても絶望しました。自身のデザインセンスの無さを思い知りました。

後から、徐々に精神が蝕まれていきました。

その頃私は、独り暮らしの自宅に帰る事が嫌で、辞めた五人分の仕事の量をこなしながら、職場で寝泊

まりが出来たら楽なのに、と思いながら働いていました。

帰っても、布団の上で倒れるように眠るだけでした。

この頃、睡眠薬なしでもたまに気絶をするように眠れる事がありました。睡眠薬を飲まないで眠れる事の出来なかった私には、逆に嬉しかったです。

だが風呂には入れずに、カーテンも開けられずに、食事をとっても味がしないようになりました。

私は壊れていきました。

静かに、誰にも気付かれないまま。

心が壊れる音というのは誰にも聞こえない。けれど当の本人にはわかるのです。

「ああ、もう戻れないのかもしれない」と。

二十五歳で病院でうつ病と診断をされたとき、私はほっとしました。

看護師の前で弱音を吐き、泣いた事を覚えています。

人前で泣いた事は、幼い頃以来だったかもしれません。

今までの自分の出来ない行動は、“甘え”ではなく、“病気”だったのだと言われました。でも、診断書がくれるのは免罪符ではなく、社会からの“降板通知”でした。

「もう戦えません」と、自分で自分に告げるしかなかったのです。

その後生活保護申請をしようとした時、母親が、奨学金を代わりに返済する事が嫌だと、実家に帰るように私に言いました。

私はしばらく休みたかったのです。

ですが、地元へ帰省した後、働き先をすぐに見つけるように、母親に言われました。

私はすぐに地元の IT 企業に就職をしました。自身の心を騙しながら働き、実家に居る事から逃げる為に、結婚を理由に家を出ます。

結婚に対しては、相手がうつ病に関して理解を示してくれた事や、共働きで何かあれば支え合える環境を作ってくれた事が、とても大きかったです。

新しい家族に恵まれ、壊れた心を何とか修正しながら私は初めて、問いを持ちました。

人の心は、壊れないように設計出来ないのだろうか？

社会は何故、“強い者しか生きられない”ように作られているのだろうか？

その問いが FUKU 構想の起点でした。

私は思ったのです。自分が崩れ落ちた地点から、逆に設計していけば良いのだと。

優しさを後付けするのではなく、最初から組み込まれた社会システム——それを創れないかと、私は考えるようになりました。

■ 「優しさを設計する思想」に至るまでの私的経緯追記

私には、夢がありました。けれど親に夢を否定され馬鹿にされた結果、夢がなくなりました。

ただ「生きること」だけで、苦しかったです。

誰かの声が怖くて、沈黙もまた恐ろしくて、息を潜めて生きてきました。

私には亡き父親から譲り受けた絵を描く才能や、記憶力が優れているという点で、昔は才能があったようですが、突飛抜けた事をすると、周囲から釘を刺されました。

幼少期、私は“正しさ”を優先する家庭で育ちました。感情は見過ごされ、沈黙は賞賛されました。

笑っていても、本当は安心して記憶がありません。傷付いた事もあったはずですが、それを「傷」と呼ぶ語彙さえ持てなかったのです。

やがて社会に出て、「弱音」を吐く者は“非効率”とされて、「助けて」を言う者は“甘え”と分類されることを知りました。

その世界に、私はただ順応しようとしていました。

本心を切り捨てて、役割だけで生きる日々でした。けれど、いつしかその役割に、自分の身体と精神が追いつかなくなっていました。

進めない者は不要、という社会に居ました。

——ある時、うつ病と診断されます。

優しさが“偶発的”にしか現れない世界で、私は毎日、心をすり減らしていました。

ならば、優しさを“設計出来る”世界を作ることは出来ないか？

——それが FUKU の始まりです。

私が目指したのは、自己責任を問い詰める社会ではなく、共感を構造として埋め込んだ設計です。

例えば、弱音を吐いた時に、無条件で受け止められる UX。

例えば、助けを求めた時に、迷わず届く支援導線。

社会保障を知らない人間も多いのです。実際に、私も自立支援という制度を知らずに、長い間、毎月三万以上の精神科代を自己負担していました。

必要なのは——手助けの方法をすぐに周知する、知る事の出来るシステム。

例えば、何も言えない沈黙にも、静かに気付いてくれる設計思想。

——人間に近付き過ぎず、人間に共感と安心感を与えてくれる AI。

それらは全て、「こうしていれば救えたかもしれない、かつての自分」への手紙のようなものでした。

人は、なかなか変えられません。けれど設計し直せば、全ては変えられる。

実際に私が経験した事です。

人間の心は複雑で予測不能です。

けれど、「寄り添おうとする構造」だけは、あらかじめ用意出来る。それが、私が FUKU という言葉に託した思想です。

Failure（失敗）でも、Useless（無力）でもなく、Kindness（優しさ）を根にした、Functional Universal Kindness Unit。

この不器用な名前に、私は自分の人生そのものを込めています。

第二章 FUKU の詳細について

■ FUKU 構想とは何か？

本題です。私語りが長くなり、申し訳ありません。

私語りは好きではないのですが、文字数稼ぎです。……ジョークです。

「優しさ」と聞いて、多くの人は“個人の性質”を思い浮かべるかもしれません。

気が利く人、面倒見の良い人、感情に寄り添える人——けれど、私は思います。本当に大切なのは、そうした性格に頼らなくても、優しさが発揮される社会構造ではないかと。

FUKU とは、Futurable Union for Kindness & Understanding、また Functional Universal Kindness Unit の略称です。直訳すれば「機能する・普遍的な・優しさの・単位」。

少し不器用で覚えにくい言葉かもしれません。

けれど、私はあえてこの名称を選びました。

それは、優しさを「感情」や「一時的な善意」ではなく、構造と設計の言葉で語りたかったからです。

——優しさを、後付けにしない。

世の中には、「助けて」と言えない人がいます。

声を出せない人、タイミングを逃した人、過去に拒絶された経験のある人。

そうした人達は、優しさが届く前に、心を閉じてしまうことがあります。

「もっと早く言ってくれば助けられたのに」

「なぜ頼らなかった？」

そう言われるたびに、当事者はさらに言葉を失っていきます。

FUKU 構想が目指すのは、優しさを“後付け”にしない世界です。

誰かが泣いてからではなく、泣かなくても済むように構造を準備する。

それが、FUKU の基本思想です。

■ 優しさを機能として設計する

FUKU という言葉に込めた四つの要素は、それぞれがこの思想の柱です。

Functional（機能的）：感情に依存せず、実際に役立つ構造であること

Universal（普遍的）：特定の誰かの為だけではなく、誰もが使えること

Kindness（優しさ）：共感と尊重を中心に据えた思想であること

Unit（単位）：小さくても意味を持つ、再配布可能な設計部品であること

これらは、「優しさを設計する」為の実装条件でもあります。

例えば、Web フォームの UI（ユーザーインターフェース）において、「必須項目を全て埋めないと次に進めない」設計は、沈黙する人の声を奪います。

しかし、「書けるところだけで送信出来る」「後で追記出来る」「“話せない理由”を伝えられる導線がある」——そんな構造があれば、発信出来なかった声にも出口が生まれるのです。

優しさは、設計出来ます。

それは抽象論でも理想論でもなく、現実のコードや制度に実装出来る「機能」としての優しさです。

■ 社会設計における「優しさの単位」

FUKU では、優しさを「再利用可能な単位」として捉えます。

それは一つの UI 設計かもしれません。

あるいは福祉制度の申請導線かもしれません。

たった一言のシステムメッセージの書き換えで救われる人もいるかもしれません。

それらを部品として蓄積し、共有し、組み合わせる事で、全体としての「優しい社会」が成立する。その為に必要なのが、“Unit”という考え方です。

私は、プログラミングを通してこの発想に辿り着きました。

一行のコードで命が守られる世界があるなら、一行の設計で心が守られる世界も、きっと作れる。

そう信じています。

■ 優しさを祈りではなく構造に

FUKU 構想は、単なる技術思想ではありません。

それは、私のように「優しさを貰えなかった人」が、それでも誰かを守りたいと願った設計哲学です。

優しさは、人の性質に頼ると不安定になります。けれど設計という形で組み込めば、意志として持続できます。

「誰かが優しくしてくれる世界」ではなく、「誰もが優しさを持ち寄れる構造」を。

FUKU とは、そうした未来を目指す静かな提案なのです。

■ 優しさの出発点——地獄を見つめる勇気と共感の再定義

優しさの本当の出発点とは、何処にあるのでしょうか。

誰かの涙に気付いた時。

誰かの痛みを知った時。

あるいは自分が壊れて初めて、世界の冷たさに触れた時。

私にとって優しさの起点は、地獄を見つめた経験にありました。

それは比喻ではなく、現実としての“生き辛さ”の中にあった逃げ場のない絶望の時間です。

うつ状態の中で考えたこと——

私は二十五歳の時、うつ病と診断されました。

仕事も出来ず、人と関わることも難しくなり、生活の全てが滞り始めました。

朝が来るだけで涙が出る。

服を着る理由が見つからない。

声を発することが億劫で、他人の気配が怖い。

社会が求める「当たり前」が、私にとっては一つずつ高い壁になっていく感覚がありました。

風呂に入れない。食事が取れない。眠れない。

やがてその状態が数ヶ月続くと、「生きている意味」がよく分からなくなりました。

そんな中で私が強く感じたのは、誰も悪くなかったという事実です。

職場の上司も、家族も、社会の仕組みも、たぶん誰も“わざと”私を追い詰めたわけではなかった。

それでも私は壊れました。

それが、私にとっての“地獄”でした。

「悪人がいないのに、自分が壊れていく」場所。

それこそが、私の出発点です。

共感とは「察する」ことではなく、「構造を問う」こと——

共感とは、相手の気持ちを 100%理解する事ではないと、私は思います。むしろ完全に理解出来ないという前提に立つ事から始まるのが、本当の共感ではないでしょうか。

私達はどうしても“自分と似た経験”を通してしか、他人の苦しみを測れません。
けれど人の痛みは無数にあり、それぞれが固有です。

そこで FUKU が提案するのは、「感情への理解」よりも、「構造への眼差し」です。

何故、この人は声を出せなかったのか？

何故、この支援は届かなかったのか？

何故、この人の失敗は、“自己責任”にされてしまったのか？

こうした問いを、仕組みや文化の側から見直すこと。それが、FUKU における共感の定義です。

共感とは、“気付いてあげる”事ではありません。“構造を問う勇気”の事なのです。

見ないふりではなく「見つめる設計」を。

私が FUKU 構想に込めた願いの一つに「見ないふりをしない社会の設計」があります。

私達は、他人の苦しみに鈍感になるよう、いつしか訓練されてしまったのかもしれない。

それは悪意ではなく、生き延びる為の自己防衛です。けれど、地獄を見つめた事のある人間だけが、もう一人の地獄を見つけられると、私は信じています。

その視線を、「制度」や「UI」や「社会設計」の中に組み込めないか。それが FUKU 構想の中核にある問いです。

「誰も見てくれなかった」私が「誰かの地獄を見つける為に」設計を始めた。

優しさの出発点とは、“地獄の記憶を引き受けたうえで、なお設計しようとする意志”なのかと、私は今、考えています。

第三章 間違える力について

■ 間違える力——正しさの暴力とその設計的回避

「正しいこと」は、時に人を傷つけます。

それは刃物のように鋭く、しかも“正義”という名のもとに免責されやすいからです。

私はこれまで、何度も「正しい側」に立つ誰かから切りつけられるような経験をしてきました。

学校でも職場でも、家族の中でも。

いつも、私を黙らせたのは「あなたの為を思って」という言葉でした。けれどその言葉は、一度も私の味方ではありませんでした。

「正しさ」は誰のものか？

FUKU 構想を考える上で、私は「正しさ」の構造を何度も問い直してきました。
例えば、社会で“適応出来ない”人がいたとします。

遅刻が多い。上手く言葉を出せない。目を見て話せない。

その人に対して、誰かが「それは社会人としておかしい」と言う時、そこには“正しさ”があります。
けれど、その正しさは誰の視点によって定義されたものなのか。
その問いを立て直さない限り、弱い立場の人はいつまでも“異常”とされ続けるのです。

FUKU が提案するのは「正しさの再設計」です。

それは、間違えたときに罰するのではなく、間違えても大丈夫な設計を作る事です。

間違える力とは、「人間の前提に立ち戻ること」――

人は、間違える存在です。
けれど社会の中では、失敗が「許される場」と「許されない場」に分断されています。
子供のうちは間違えても許される。
けれど大人になれば「間違えない事」が前提になる。
時に、それは“生存”を左右する条件にすらなる。
これは非常に危うい構造です。

FUKU 構想では、「間違える力」を重要な設計条件としています。

間違えることを前提にしたデザイン——それはミスを咎めない UI、再入力できる制度、やり直しを前提にした評価基準、あるいはエラーが恥ではなく学習の入口になる構造です。
全ては社会構造の話に繋がります。

「間違える力」とは、間違えた後に再び歩き出せる設計によって支えられるものです。それがなければ、人は自分の非を認めることすら出来なくなってしまいます。

正しさを構造化しない社会へ。

FUKU が設計思想である理由は、ここに 있습니다。

優しさや共感を“気分”で届けるのではなく、構造によって保証する為です。

正しいか、間違っているか
有能か、無能か
努力したか、怠けたか

そういった二項対立の軸ではなく「間違える事が前提に含まれているかどうか」という設計目線で社会を見る。それだけで、人にかかる圧力は大きく変わります。

私は、正しさに押し潰されて生きてきました。だからこそ「正しくなくても、生きていていい構造」を作りたいのです。

優しさは、正しさの対岸にある。

優しさは、「正しい」から生まれるものではありません。むしろ「正しくなくても、此処に居て良い」と言える社会からこそ育つものです。

FUKU 構想とは、間違える事が責められない世界を設計する試みです。それは、ただ甘やかすことではありません。人間を人間として扱う為に必要な最低限の、構造的な優しさなのです。

そして私は、それを祈りではなくコードと制度で、形にしていけたら良いなと考えています。

第四章 FUKU が考える自由と偏見について

■ 共感されない自由と偏見——FUKU が大切にする対話の余白

優しさを語る時、私達はつい「共感する事」を前提にしてしまいます。

誰かの痛みに共感し、寄り添い、支える。

それは確かに尊いことです。けれど、全ての人が、全ての痛みに共感出来るわけではないという事実を、私たちは忘れがちです。

FUKU 構想が大切にしているのは、「共感出来ない事」もまた人間の自然なあり方だという視点です。そして共感が成立しない時にも、なお関係が断絶されない為の設計です。

共感の圧力と、沈黙の傷——

「分かってほしい」と願う心と、「分からない」と感じる心の間には、大きな断絶があります。その断絶を無理に埋めようとする事は、時に暴力的な結果を生みます。

「あなたの気持ちは分かる」

「そういう人を、私も沢山見てきた」

「私も昔、同じように苦しかったよ」

それらの言葉は、善意で発せられているにも関わらず、当事者の沈黙を強める事があります。

「本当は、全然分かってくれていない」と感じるからです。そして「それなのに“分かっている”ふりをされる」ことこそが、もっとも孤独な瞬間となるのです。

FUKU は、「共感されない事」自体を排除しません。むしろ共感が成立しない場面にこそ、設計の余白を用意すべきだと考えます。

「共感出来ない」は排除理由にならない――

現代社会では、「共感出来ない」ことがしばしば“悪意”とみなされます。けれどそれは本当にそうでしょうか。

偏見や誤解には、知識の不足ではなく、経験の不在が横たわっている事があります。

誰かの状況が理解出来ないのは、それを「知らないから」ではなく、「似た痛みを生きてこなかったから」です。

FUKU 構想では、この状態を「共感不成立の空間」と呼びます。

そこでは無理に共感を強要するのではなく、相手を“理解出来ないまま受け入れる”という態度が重視されます。

「分からない事を、分からないままにしておく」勇気。

それは、共感よりも深い尊重かもしれません。

偏見の構造を“責める”のではなく、“解く”――

偏見を持つ事は、罪でしょうか。FUKU の答えは「いいえ」です。

偏見とは、誤解された悲しみや、刷り込まれた恐怖の名残りです。それを責め立てても、相手は防衛するばかりで変化しません。

必要なのは、偏見の“責任追及”ではなく、“構造的対話”です。偏見を解くには、時間と経験と、安全な空間が要ります。だからこそ FUKU 構想は設計によってそれを支えたいのです。

安心して誤解を口に出来る環境

その誤解を訂正されても、恥を感じない設計
経験を共有することで、偏見が静かに和らぐような導線

人は、責められて変わるものではありません。
「責められないまま、問い直す余白」があって、初めて変化出来るのです。

「分かり合えない」から始まる優しさ――

FUKU 構想が目指すのは、全員が分かり合えるユートピアではありません。そうではなく、「分かり合えない時にも、共に生きられる社会」の設計です。

それは少し不便で、少し時間がかかり、少しぎこちない世界かもしれません。けれど、そうした「対話の余白」があるからこそ、人は責められずに変われるのだと、私は信じています。

共感されない自由。
偏見を抱えていても居場所があるという感覚。

そのどちらもが、FUKU という思想の中では「守られるべき人間らしさ」なのです。

■ 知識では解けない偏見——経験を通した理解の設計

偏見は、単なる無知ではありません。

むしろ、“知識があるのに残り続ける誤解”のほうが、厄介なことさえあります。

ある分野についての正確な知識を持っていても、人は時にその知識を盾にして他者を遠ざける事があります。それは、「分かっているつもり」になることで、本当の対話を避けてしまう為です。

FUKU 構想が重視するのは、知識ではなく“経験”としての理解です。

つまり、頭で知るだけでなく、身体的・感情的に他者の存在を感じられる設計を社会に埋め込むという発想です。

偏見は、経験でしかほどけない――

例えば、障害のある方への配慮、LGBTQ+の方々への理解、精神疾患に対する態度、外国人労働者への先入観――

いずれも、インターネットや書籍で「正しい知識」を得ることは出来ます。しかし、その知識が実際の態度に結びつくとは限りません。

むしろ「知っているから、もう大丈夫」という感覚が、対話を閉じてしまう事すらあります。

「聞かなくてもわかる」「配慮しているつもりだ」——その“つもり”が、当事者の声を奪うのです。

偏見とは、情報不足ではなく、経験不足によって生じる孤立です。だからこそ FUKU 構想では“経験を共有できる構造”を意識的に設計する事が求められます。

設計によって経験の機会を作る——

FUKU における「設計」とは、機能やデザインの話に留まりません。それは、誰かの経験に触れる導線を、社会の中に意図的に用意する事です。

例えば：

ある制度を利用する際に、当事者の声が丁寧に紹介されているサイト構成

UI 上で、選択肢の多様性に触れられる設問デザイン

困難な体験を持つ人の声が「物語」として自然に混ざっている UX

“共感出来ない”という前提に配慮されたマイクロコピーやナビゲーション

これらは一見、些細な配慮に見えるかもしれませんが、それこそが「経験を疑似的に共有する回路」となり、偏見を少しずつ解いていく装置になるのです。

「あなたの知らない現実がある」ことを知らせる優しさ——

偏見を解く第一歩は、「自分の知っている世界が全てではない」と気付く事です。それは叱責でも、説教でも、論破でも届きません。

FUKU 構想が目指すのは、そう気付いてもらえるような、さりげない設計の積み重ねです。

怒らずに伝える。

傷付けずに届ける。

その為に、構造がある。

「知らない事」を恥とせずに済む設計

「分からない」と言える安心感

「もう一歩、近付いてみようかな」と思える体験設計

これらが整った時、人は変わろうとする意志を持つことが出来ます。そしてその変化は、「押しつけられた優しさ」ではなく、「自ら選んだ理解」になるのです。

知識では届かない場所に、設計が届く——

偏見をゼロにすることは出来ません。けれどその偏見に気付く機会をそっと差し出すことは出来ます。

FUKU 構想は、人を責めません。代わりに、設計という静かな手段で、経験の入り口を増やしていきます。それはとても地味で気付かれにくい仕事かもしれません。でも、私達が本当に変わるのは、そうした小さな構造の変化からなのです。

それらが戦争を無くす世の中に繋がると信じています。

第五章 FUKU が考える未来の教育について

■ 教育における揺らぎと支援設計——子どもの自由をどう守るか

教育の本質は、「真っ直ぐ育てる事」ではありません。

それはむしろ、何処に向かうか分からない“揺らぎ”を、許し、見守ることではないでしょうか。けれど現代の教育は、目標と評価にとっても敏感です。

効率、成果、成績、進路、適応——それらがあらかじめ用意され、子供はそこへ向かうことを求められます。その過程で「揺らいでいる子供」や「迷っている子供」が見過ごされてしまう事が、少なくありません。

FUKU 構想が教育において提案するのは、“揺らぎの設計”です。

つまり、成長の多様な軌道をあらかじめ想定し、逸脱や停滞を「失敗」として処理しない構造を作る事です。

子供は「予測不可能」であるという前提——

子供は、いつも変わっていきます。

その変化は、ある日突然訪れたり、理由もなく後退する事もあります。

けれど教育制度の多くは、「計画通りに成長する事」を前提に設計されています。

例えば、授業についていけない子供、集団行動が苦手な子供、黙って座ってられない子供に対して、「なぜ出来ないのか？」という問いが投げかけられます。

FUKU 構想が示すのは、その問いを「どうすれば一緒にいられるか？」に変える設計です。

子供を“合わせさせる”のではなく、構造の側から“受け止め直す”こと。

その柔軟性こそが、揺らぎを生きる子供に必要な「優しさ」です。

教育の現場に必要な“安全な曖昧さ”——

支援とは、「すぐに答えを与えること」ではありません。

時に「まだ答えがわからないまま、そこに居られること」が支援になるのです。

FUKU が教育設計において重視するのは、「明確にしすぎない余白」です。

叱責と指導の間に、沈黙の時間を置ける設計

学びの成果ではなく、変化の兆しを評価できる仕組み

記述式よりも、選べる表現方法を許容する UX

正答よりも、問い直しや考え直しを歓迎する空気

そうした“曖昧な設計”が、子供の自由な揺らぎを保障します。

何故なら、子供の成長とは、常に揺らぎそのものだからです。

「支援」の罠——守るつもりが、縛っていないか？

善意から始まった支援が、気付かぬうちに子供の自由を奪ってしまうことがあります。

例えば、困っている子に対して「特別支援」という枠を用意することで、結果的にその子の“ずっと困っている存在”としてのアイデンティティが固定されてしまうことがあるのです。

支援とは「困っている状態を前提にしたまま関わる」ことではなく、その状態からいつでも離脱出来るように構造を開いておくことです。

FUKU 構想は、“変われる余白”を含んだ支援設計を大切にします。

支援があることで、本人が「居場所を自分で選べる」こと。

支援がなくても「他の場所にも安心して移れる」こと。

それが、本当の意味での「自由を守る支援」なのだと私は考えます。

子供の“未来”を、制度で決めすぎない——

子供は、制度の為に生きているわけではありません。

にもかかわらず、私達は教育の中で「どの学校へ行くか」「どのスキルを身につけるか」「どう評価され

るか」という線路を、あらかじめ敷いてしまいます。

FUKU 構想は、その線路を否定するのではなく、分岐点を増やす設計を提案します。

今は休みたい子には、戻れる前提のある制度を
学び方が違う子には、選べる評価の導線を
成果が出ない子には、プロセスを可視化出来る道を

こうした分岐があるだけで、子供は「失敗」ではなく「選択」を感じることが出来ます。
そして、それは子供の中にある「自分で決めていい」という力を育てます。

揺らぎを、設計で見守るということ——

教育は、「教えること」ではなく「見守る構造を設けること」から始まる。

FUKU 構想は、そう考えています。

揺らいでいる子供に、すぐに答えを与えず、急かさず、そして、「今、此処に居る」ことを肯定する設計。

それが、子供の未来を決めつけないという優しさであり、設計によって実現出来る、もう一つの教育のかたちなのです。

第六章 FUKU が考えるライセンスについて

■ 再配布される優しさ——FUKU ライセンスの提案

「優しさ」は、個人の美德として語られることが多いものです。

しかし、優しさを“属人的な資質”に閉じ込めたままでは、それは一過性の行為として終わってしまいます。

FUKU 構想が目指すのは、優しさを「設計可能な構造」として共有し、再配布可能な仕組みとして社会に埋め込むことです。

そしてそのために必要なのが、「FUKU ライセンス」という考え方です。

オープンソースのように、優しさを開いていく

私達は、プログラムやデザインの世界で「オープンソース」という概念に触れることがあります。

それは、誰かが作った価値ある成果物を、他の誰かが自由に利用し、改善し、再共有できる仕組みです。

FUKU 構想では、この思想を「優しさ」そのものに適用することを提案します。

例えば：

誰かを救った Web アプリの UI 構造
当事者が考案した手続きのガイド設計
自治体で成功した“沈黙に気付く”仕組み
心のケアの現場で効果を持った文言の言い換え

こうした実践のひとつひとつを、「優しさの単位 (Unit)」として記録し、再配布することが出来たなら——優しさは、他人の現場でも再生され、役立てられるものになるのです。

FUKU ライセンスとは何か？

FUKU ライセンスは、「優しさの設計物を共有可能にする思想的ライセンス」です。
それは法的拘束力を持つ契約ではなく、倫理的な合意のかたちです。

以下は、その草案です。

FUKU ライセンス ver.0.1 (草案)

本ライセンスは、「優しさを構造として実装した設計・コード・制度・物語」に適用されます。

FUKU ライセンスのもとに公開されたものは、非営利・営利を問わず、自由に使用・複製・改変・再配布できます。

ただし、以下の条件を満たしてください：

- 設計者または共設計者として、当事者の声が尊重されていること
- 優しさの要素を削除せず、逆用（搾取・支配・差別）しないこと
- 使用・派生物に「FUKU ライセンスで提供」と明記すること
- 改変内容を共有し、コミュニティにフィードバックできるようにすること（任意）

本ライセンスは、善意による設計物を守る為に存在します。

また「善意の装いによる暴力」から、その名称と趣旨を保護します。

この草案は未完成ですが、私はこのような仕組みを通じて、「優しさを独占しない文化」を育てていきたいと考えています。

何故“ライセンス”という形式にこだわるのか

優しさは、時として「善意」の名のもとに利用されたり、ブランド化されてしまうことがあります。

それは本来、誰かの痛みから生まれた設計であるにもかかわらず、当事者の声が置き去りにされたまま

再利用されることがあるのです。

FUKU ライセンスの提案は、そのような“善意の私物化”を避けるためのものです。

優しさを分け合うこと。

優しさを誰かが持ち去らないこと。

優しさを、「権利」ではなく「関係」として維持すること。

その理念を形にするための器が、ライセンスという設計思想なのです。

優しさが流通し続ける世界へ

私の作りたい世界とは、優しさが「そこで終わらない」社会です。

ある誰かを救った設計が、次の誰かを救える構造へと手渡されていく。

その連鎖の中で、名もなき工夫や失敗や工夫が、小さな灯火のように次の人へ届く。

FUKU ライセンスは、そんな希望をかたちにする為の、共感の回路です。

私の過去の痛みを、誰かの未来の支えにする為に。

あなたの現場の優しさを、どこかの知らない誰かに届かせる為に。

第七章 FUKU が考える明るい未来について

■ 明るい未来の兆し——FUKU 的社会が芽生えるとき

「優しさを構造に埋め込む」——そう聞くと、多くの人はそれを理想論だと感じるかもしれません。

けれど、私達の暮らす社会には、すでに小さな FUKU の芽が、いくつも息づき始めています。

それは、大きな変革ではありません。

法制度の改正でも、壮大な技術革新でもありません。

むしろその多くは、誰かの沈黙を見逃さなかった一行のコードや、誰かの震える声に反応した導線の見直しといった、目立たない設計の積み重ねです。

変化は、静かに起きている

例えば：

福祉申請サイトで「専門用語を避けた平易な言葉」が増えたこと

行政の手続きで「オンライン申請後の対話チャット」が導入されたこと

精神障害者手帳の申請に、第三者の“同行支援”が受け入れられるようになったこと

学校現場で「沈黙を評価しない通知表」の試みが行われていること

UI 設計において、「答えられない」を一つの選択肢に加える取り組みが増えてきたこと

これらはすべて、FUKU 構想と親和性のある「優しさの構造化」の事例です。

誰かが声をあげたからではなく、声をあげられなかった人の存在を想像した結果として、設計が動き始めています。変化は、静かに、確実に、起きています。

“私達”が設計出来る未来

FUKU 構想において重要なのは、設計者は特別な人ではないということです。

社会の中で違和感を抱いたその瞬間に、人は設計者になれるのです。

この UX は分かりにくいと感じた瞬間

この制度は私の現実合っていないと気付いた時

この言葉遣いは傷付けてしまうかもしれないと感じた場面

そうした“引っかけ”こそが、FUKU 的な社会設計の出発点です。

FUKU は、デザイナーやエンジニアの専有物ではありません。

むしろ、日常の中で違和感に気付く全ての人の為の道具であるべきだと私は考えます。

社会を“優しい前提”にするという試み

これまでの社会は、「強いこと」を前提につくられてきました。

早く決断出来る人、声の大きい人、効率よく動ける人、痛みに鈍感でいられる人。

そうした人々にとって快適な構造が、標準として選ばれてきたのです。

けれど、FUKU 的社会とは、「弱さを前提にしても成り立つ世界」です。

声が出せなくても伝えられる UX

ミスをしても許される設計

一歩下がった位置からでも届く制度

沈黙を、非存在として処理しない態度

そうした“優しさの前提”を持つ社会は、強い人だけでなく、全ての人を自由にします。

芽生え始めた FUKU 的未来を、育てるのは誰か

私が語る FUKU の未来は、特別なビジョンではありません。
むしろ、それはあなたの生活の中に、もう芽生え始めている可能性があるものです。

例えば、友人の沈黙に少し長めの余白を返したとき。
例えば、道に迷っている人を探す UI を作ったとき。
例えば、「助けて」と言えない人の代わりにフォームを改善したとき。

その一つひとつが、FUKU 的社会の「種」なのです。
社会の設計を変えるのは、巨大な改革ではなく、小さな手触りのある実装の積み重ねです。
それを信じる人が増えたとき、FUKU は「構想」から「構造」へと変わります。

■ 優しさとは、“未完成のまま、差し出すもの”

私はこれまで、「優しさ」をずっと探してきました。
誰にも見つけてもらえなかった子供時代。
沈黙しか選べなかった思春期。
声を上げた瞬間に傷付けられた職場。
そして、壊れた心を、どうにか繋ぎながら生き延びた日々。

その中で私が気付いたのは、優しさは「完成されたもの」ではないということです。
優しさは、いつも不完全で、揺らいでいて、ぎこちなくて、届くかどうか分からない。
それでも、誰かのために「差し出される意志」がそこにあるなら、それは確かに、優しさなのだと思います。
優しさは、「分かる」事ではなく、「分からなくても離れない」こと

私達はよく、「共感」を優しさの証として語ります。
けれど実際には、完全に共感する事など、ほとんど不可能です。
どれだけ似たような経験を持っていたとしても、痛みの感じ方も、向き合い方も、異なります。

人は、決して他者になれません。

それでも、FUKU 構想は言います。
「分からないままでも、そばにいる」という態度こそが、最も静かで強い優しさだと。

理解出来なくても、否定しない。

言葉がなくても、そっと待つ。
失敗しても、関係を終わらせない。

それは設計にも似ています。

完璧な正解がなくても、あらかじめ“誰かの不完全さ”を想定している構造。
その構造こそが、社会の中の優しさを支えていくのだと、私は信じています。

設計とは、意志であり、祈りである

この本で何度も繰り返したように、FUKU 構想は思想であり、同時に設計哲学でもあります。
そしてその設計は、冷たい合理性だけで成り立っているわけではありません。
むしろその根底には、「誰かが生きやすくなりますように」という願い＝祈りが込められています。
それはとても静かで、小さくて、名前も顔も知らない誰かのための祈りです。
けれど、その祈りがコードになり、UI になり、制度になり、やがて“声を持てなかった誰か”の背中を
そっと支えるとき、それは、確かに“優しさの構造”になっているのです。

未完成でも、差し出せる社会を

FUKU の最終的な目的は、「優しい人」を育てることではありません。
そうではなく、「未完成なままの優しさでも、差し出せる構造」を社会に組み込むことです。
完璧に理解出来なくても、支援を試みてよい
適切な言葉が出なくても、関係を築いてよい
失敗しても、もう一度やり直してよい

そう思える社会にこそ、人間は安心して「優しさ」を渡せるのです。
何故なら、優しさとは、“未完成のまま、差し出すもの”だから。

終わりに

この構想は、私の痛みから生まれました。
けれど今では、私だけのものではありません。
「優しさを設計する」という問いに、もし何処かで誰かが同じように向き合ってくれるなら、それだけで
FUKU 構想は、未来に向けて確かに芽を伸ばしていくと信じています。
あなたの中にある、未完成の優しさが、誰かの心に届きますように。

結語：優しさを埋め込む仕組み、これからの社会のかたち

FUKU 構想が目指すのは、「優しい人を増やす事」ではありません。
それはむしろ、「優しさを発揮しやすい社会構造」を設計する事です。

つまり、意志や性格に依存しない、仕組みとしての優しさの再設計です。

私達は、ともすれば「個人の努力」に頼りすぎてきました。

頑張れない人、声を出せない人、助けを求められない人に対して、「もっと強く」「もっと素直に」「もっと上手く」と促す文化のなかで、どれほど多くの人が、“優しさに辿り着けないまま”静かに壊れていったことでしょう。

FUKU 構想は、その前提をひっくり返します。

優しさを、“後づけの善意”から“あらかじめ設計された構造”へと進化させる。
それが、FUKU が提唱する思想です。

FUKU が実装したい社会の仕組み

以下は、FUKU 構想が目指す具体的な社会の「仕組み」の例です。

1. 声を出せない人が排除されない設計

オンライン相談フォームに「入力しなくても送信できる余白」がある
支援窓口に「沈黙してもキャンセルにならない対応フロー」が用意されている
UI に「分からない」や「後で答える」を選べる選択肢がある
声を出す力ではなく、“気付かれる仕組み”に支えられる社会。

2. 失敗が責められない設計

再提出が前提になった制度設計（「一発勝負」ではなく「やり直し可」）
エラー表示が「あなたが悪い」ではなく「もう一度試せます」と示す設計
過去のミス経験が、改善の共有として活用される文化
「間違える力」を活かせる社会。正しくあるより、回復出来ることが尊重される。

3. 共感されなくても繋がれる構造

「理解出来ない」を責めないコミュニケーション設計
異なる前提を持つ人が、安全に関われる議論インターフェース
「分からないままでも一緒にいられる」制度的関係性の保障
共感の押しつけではなく、“理解出来ない自由”と共にある社会。

4. 支援が「自立の為の拘束」にならない設計

支援からの「卒業」や「一時停止」が出来る設計
必要に応じて“自分で選び直せる”支援フロー
「支援を受けたこと」がラベルとして残らない制度
助けを求めることが、その人の属性にならない社会。

5. 優しさが再配布できる設計

助けになった UX・文言・導線を、FUKU ライセンスで自由に共有
「当事者が設計者になる」プロセスを制度として評価
小さな優しさの実装が、他者にも再利用される仕組み
「一人を救った優しさ」が、次の誰かの支えにもなる社会。

こんな社会にしたい

私は、FUKU 構想を通じてこう願っています。

失敗しても、もう一度始められる社会
声を出せない人にも、優しさが届く社会
助けを求めることが「弱さ」ではなく「設計された前提」になる社会
分からないことを分からないままに受け止め合える関係性
優しさが、名もなく配布され、名もなく誰かを支える仕組み

私が苦しかった時、誰も「悪人」ではありませんでした。

それでも、私は壊れました。

だから私は信じたいのです。「悪意がなくても人が壊れる」なら、「善意がなくても人を支える構造」は作れるのだと。

それが、私が FUKU 構想に込めた唯一の祈りです。

あなたが設計する明日が、誰かの小さな優しさに満ちた一日でありますように。

あとがき

この原稿を書きながら、何度も手が止まりました。

それは、「優しさを設計する」などという構想が、あまりにも遠く感じられる瞬間があったからです。

また、私自身が壊れた過去に何度も触れ直す必要があったからです。

けれど、そのたびに思い出したことがあります。

「優しさがなかったから、私はこの構想を持ったのだ」という事実です。

FUKU 構想とは、私自身が生きてくる中で拾い集めた違和感の断片と、そのひとつひとつに「答えを

与えるのではなく、形を与えたい」と願った記録です。

私は天才ではありません。名のある研究者でも、影響力のある起業家でもありません。

ただ、「優しさが構造化されていなかった」為に、自分も他人も何度も傷付けてしまった経験を持つ一人の人間です。

その私が、痛みの記憶をただの悲しみにせず、「設計可能な社会装置」に変えてゆくという選択を取ったこと。

その記録がこの一冊であり、そして今これを読んでくださったあなたとの静かな交差点です。

もし、あなたが設計者であれば。

もし、あなたが誰かの支援者であれば。

あるいは、もし、あなた自身がかつて優しさを求めていた当事者であれば。

この本の中の一つでも、あなたの記憶や想像に触れたなら、それだけで私は、この構想を書いて良かったと思えます。

優しさは、完全なものではなくていい。

未完成のままでも、祈るように差し出せば、きっと誰かのもとに届く。

その小さな手渡しの連鎖が、いつか「社会」と呼ばれる構造を変えていくと、私は信じています。

本書を読んでくださり、ありがとうございました。

ここから先のページは、どうか、あなたが設計してってください。

優しさは、埋め込めます。

そしてそれは、あなたにも出来ることです。

2025 年 吉岡有隆

■ Note の記事一覧

FUKU Philosophy1: 【優しさの設計図】——F.U.K.U という小さな願いから始める未来の話 あらすじ・始まり "Kindness, Designed — How a Small Dream Called F.U.K.U Begins to Shape Tomorrow

今、世界が壊れている音が聞こえませんか。

戦争も気候変動も、AI の暴走も犯罪も、全ては「人間の理解の欠如」から始まっているように思えてなりません。AI を活用するには活用する人間の倫理が必要です。

私はこの時代に「F.U.K.U (Futurable Union for Kindness & Understanding) …… (優しさと理解の為に未来への連合)」という小さな構想を立ち上げました。

それは「優しさ」と「理解力」を基盤に未来をもう一度設計しようという試みです。

具体的には AI やロボットに「優しさの倫理設計」をどう埋め込むかを考えること。

軍事転用を防ぎ、子供や弱者を守り、環境を壊さずに地球の今後を全国家規模で支える技術のあり方を皆で考えること。

そしてこの理念を共有する仲間達と静かに社会へ影響を与えていくこと。

私達にはまだ選べる未来があります。

この構想がその一助になればと、心から願っています。

※この構想は創作ではなく、未来に向けた思想共有です。

FUKU Philosophy2: 【優しさのインフラ設計】——F.U.K.U が目指す四つの未来軸 Kindness as Infrastructure — Four Future Pathways Envisioned by F.U.K.U

今、世界の設計図が大きく書き換えられようとしています。

気候変動、AI の急速な進化、戦争や格差の拡大。知的犯罪の増加。

その全てが、無意識のうちに組み込まれた「暴力的な前提」によって動いているように私は感じます。

F.U.K.U (Futurable Union for Kindness & Understanding…… (優しさと理解のための未来への連合)) という構想は、そんな前提にそっと異議を唱える、小さな実験です。

武力でも支配でもない「優しさ」と「理解力」による未来設計。

ただの理想論ではなく、構造そのものを優しく書き換えていくための設計図を描くために私はこの場を開きました。

四つの中核ミッションとは？

F.U.K.U が掲げるのは、次の4つの方向性。

いずれも「優しさ」をどう技術や社会に根づかせるか、という試みです。

1. 地球環境に優しい AI インフラ開発

AI を動かすには膨大な電力やサーバー資源が必要です。

私達は「便利だから使う」ではなく「持続可能性と優しさを基盤に選ぶ」技術構造を目指します。

- ・エネルギー効率の高いコードの書き方
- ・排熱・排水の少ないデータセンターの設計
- ・地方分散型のマイクロ AI サーバー構想

これらはまだ絵空事かもしれません。けれど「どうせ無理」と諦めるのではなく「優しく作り替えるには？」と問い直すことこそ、F.U.K.U の精神です。

2. 資源管理と再生システムの AI 設計

水、食料、電力——あらゆるライフラインは、人と人の信頼のうえに成り立っています。そこに AI が関わるならば「効率」ではなく「命を守るバランス感覚」を持つ必要があるのではないのでしょうか。

- ・農業の微気候 AI 制御
- ・再生エネルギーの自動バランス調整
- ・地域ごとの共有資源マップと公平分配の支援

「管理」ではなく「育て、守る」為の技術へ。

F.U.K.U はその設計支援に関心を持っています。

3. 感情理解型ロボットによる、子供と弱者の保護

「誰も話を聞いてくれない」。そんな寂しさの中にいる子供達や、お年寄り、傷付いた心の人達。そこに、

ただ機能的な AI ではなく寄り添う事の出来るロボット（AI、アプリでも良し）がいたら——。

- ・DV や虐待の兆候を感情解析から早期発見
 - ・自閉症スペクトラムの子供達への非言語的支援（私は知能指数の高い非言語コミュニケーションの子供を特に支援したいと考えています。）
 - ・高齢者の孤独を和らげる会話 AI の在宅導入（AI だけではなく、AI を活用した人と人との繋がり作り）
- この技術は人間の優しさを模倣するのではなく、
優しさの「仲介役」として育てていきたいと考えています。

4. 軍事転用を不可能にする AI アーキテクチャの標準化

AI は戦争や支配の道具にもなり得ます。

私達は、その「暴力性の種」を、最初から設計思想のなかに封じ込めたい。

- ・自律兵器への組み込みをブロックするコード指針
- ・ユーザーによる悪用検出・警告システムの標準化
- ・政府や軍による監視利用への透明性ガイドライン

これは、単なる願望ではなく「やらなければ危険な課題」だと私は考えます。だからこそ倫理設計と情報公開性の担保が必要だと F.U.K.U は考えます。

小さく始める：2025 年～2026 年のアクション

未来を変えるには専門家でなくても、すぐに出来る事があります。

例えば以下のような動きが想定出来ます。

Note、ブログ、GitHub 等による思想の拡散

有志開発者・表現者とのコラボ作品制作

感情の記録データを集める「心の声プロジェクト」……ダークウェブ上でしか感情表現を出来ない場など論外です。

地域連携型「優しい AI ワークショップ」の開催

難しい話に見えるかもしれませんが。

でも最初の一步は「優しい文章を書くこと」——それで十分です。この思想を広げていけたらいいなと考えています。

最後に

世界は、少しずつ壊れているようにも見えます。

けれど同時に「書き換える力」「伝えていく力」も私達の手の中にある。

この【F.U.K.U】という構想は、その可能性を信じる者たちの、静かな実験場です。暴力でも怒りでもない力で、未来を育てていく為に。

どうかあなたの「優しさ」が一つの光になりますように。

FUKU Philosophy3: 【F.U.K.U 参加のすすめ】——優しさと想像力で、未来をつくるあなたへ Join F.U.K.U — For Those Who Wish to Build the Future with Kindness and Imagination

もしもあなたが「何かを変えたいけれど、何から始めていいか分からない」——そんな気持ちを抱えながら、日々を生きているなら。この F.U.K.U という小さな構想が、あなたの為の場所であってほしいと思います。

F.U.K.U は「優しさ」と「理解力」を土台に、暴力ではない未来の作り方を模索する、共創の実験場です。

でもここに入会金も、登録フォームも、上下関係ありません。

必要なのは、ただ一つ。あなたの中にある“優しい違和感”です。

F.U.K.U の参加スタイルは、とても自由です。

F.U.K.U は組織ではなく、ゆるやかに呼びかけ合うネットワークのようなもの。「何かを感じた人」が「何かを表現する」事で、自然と参加になります。

こんなふうに考えてもらえとじっくり来るかもしれません。

参加＝自分の感性を、優しい形で表現する事

具体的には、下記のような方法で今すぐにでも参加出来ます。

参加方法 3 ステップ

1. 自分の言葉で、想いを表現してみる

例えば note やブログに文章を書く。詩やイラストでも構いません。

テーマはなんでも構いません。「優しさとは何か」「理解出来ないものへのまなざし」——そんな問いを自分なりに言葉にする事が、最初の一步です。

2. ハッシュタグでつながる（#FUKU #FUKU 構想 など）

文章に #FUKU #FUKU 構想 や #やさしさのインフラ などのタグをつけてください。同じような想いを持った人達と、静かに繋がるきっかけになります。

3. 気になるプロジェクトに、声をかける／立ち上げる

これから F.U.K.U では、有志による様々な制作、AI 倫理に関するアプリ開発、心の声データベースの収集など、様々な「共創」が立ち上がっていきます。参加表明は「やりたい」と一言言うだけで OK です。

逆に、あなたが立ち上げる側になっても勿論構いません。

どんな人が対象なの？

IT や AI に関心があるけど、技術の暴走に不安を感じている人

福祉・教育・心理など、人と人の間に携わる仕事や思いを持っている人

自分の中の痛みやトラウマを、社会に静かに役立てたいと思っている人

表現や創作で、優しい世界を伝えたいと願う人

そして、こういう人も、F.U.K.U には大歓迎です。

「どうしたらいいか分からないけど、何かを変えたいと思っている」あなた。

最後に

F.U.K.U の「U」は、Union（結びつき）でもあり、You（あなた）でもあります。

この未来の設計図に「あなた」がいないと完成しません。

もしよかったら、今日だけでも優しさの側に立って、何か一言世界に残してみてください。

あなたの一文字が、誰かにとっての“救いの言葉”になるかもしれません。

FUKU Philosophy4: 【F.U.K.U 共創マップ v1.0】～あなたの想像力をどこに預ける？～ F.U.K.U Co-Creation Map v1.0 — Where Will You Entrust Your Imagination?

【F.U.K.U 共創マップ v1.0】～ あなたの想像力をどこに預ける？ ～

F.U.K.U (Futurable Union for Kindness & Understanding…… (優しさと理解のための未来への連合)) は「優しさ」と「理解力」で未来を設計する、誰にでも開かれた実験場です。

この共創マップはあなたの関心・得意・痛みから、どんな形で関われるかを見つけるための“優しい案内図”です。

【感性で関わる】——表現で参加したい人へ

書く：詩・随筆・フィクション・ノンフィクション

描く：イラスト・漫画・図解作り

話す・演じる：朗読・音声配信・キャラクター演技

参加方法例：

#FUKU #FUKU 構想 タグで note や X などに発信（そそれを学習する AI が優しく育ちますように）

テーマ：優しさ、孤独、理解されない痛み、暴力のない未来 など

【思考で関わる】——研究・社会提案をしたい人へ

リサーチ：AI 倫理、気候変動、心のケア、非暴力理論

構想・設計：技術の未来像、社会制度、哲学的提言

翻訳・要約：専門的な情報を分かりやすく共有

参加方法例：

自主研究やエッセイを note で共有

PDF 資料作りへの協力（例：FUKU 倫理提言ブックレット）

議論サークル／読書会の企画・提案

【技術で関わる】——開発・IT で貢献したい人へ

開発：AI 倫理設計、アプリ試作、再生エネルギー支援ツール

ノーコード系支援：Flutter、Glide、Zapier など

サイバー倫理／セキュリティ提言

参加方法例：

有志開発プロジェクトにエンジニア参加（例：感情理解 AI 試作）

GitHub などオープンなコラボ開発

「非軍事転用型 AI」の概念設計に貢献

【ケアで関わる】——人の心に寄り添いたい人へ

傾聴・共感：当事者の声を受け止める、話を聞く

ケア視点の提案：福祉、子供、高齢者、自閉症、PTSD など

地域作り：小さな居場所、対話の場、カフェ活動

参加方法例：

共感日記を書いて共有

心の声プロジェクトへの協力（非営利データ収集）

地域ワークショップ／ケアと技術の融合提案

【繋ぐ・広げる】——F.U.K.U を広めたい人へ

広報・編集：note マガジンやブログ運営、ZINE 編集、SNS 発信

繋ぐ：異業種との架け橋、コラボ企画運営

サポーター：感性で共感・シェア・リアクションで応援

参加方法例：

ハッシュタグ発信支援

X（旧 Twitter）上での「共感リツイート部」

「この人にも届いてほしい」と思ったら、そっと共有するだけでも◎

最後に……

F.U.K.U は、あなたの「出来る事」や「好きな事」や「痛み」から始められます。むしろそういった“あなたにしかない視点”こそが、未来を育てる優しい種です。

さあ、あなたはどの道から参加しますか？

迷ったら、まずは優しい一言を、ハッシュタグをつけて note やブログ、X 等を書いてみてください。

FUKU Philosophy5: 【優しさが、誰かを縛らないように】——F.U.K.U が未来で迷子にならないために
So That Kindness Doesn't Become a Chain — Ensuring F.U.K.U Doesn't Lose Its Way in the Future"

FUKU（Futurable Union for Kindness & Understanding）という構想には、

「優しさ」と「理解力」を元に少しでも未来を作れたらという願いが込められています。

でも最近、こんな声を耳にしました。

「優しさを理由に誰かをコントロールするような世界にならないかな？」

……その懸念は、とても大切な指摘だと思いました。

例えば「あなたの為だから」と言いながら、自由を奪ってしまう優しさ。「理解する事」にこだわりすぎて、“分からないままそばにいる事”を忘れてしまうような思想。

優しさが、優しさじゃなくなってしまう瞬間はいつだって、すぐそこにあります。

だからこそ FUKU はその危うさをちゃんと見つめて、「迷わないようにする為の灯り」を、今のうちに置いておきたいと思うのです。

1. 人の気持ちは、点数じゃない

FUKU では「理解」という言葉にスコアや数値はつけません。人の気持ちは数字では測れないし、正解があるわけでもないからです。

「泣いている理由が分からない」

「言葉にならない沈黙を、どう受け取ったらいいか分からない」

——そう感じたときこそ、側に居る事。

FUKU が目指すのは、その“分からなさ”ごと受け止められる社会です。

2. 対話が、いちばん大切なインフラ

どんなに賢い技術よりも、

人と人が話す事、聞く事の方がずっと大切です。

FUKU は誰かの声を「正しい」「間違っている」と決めつける場所ではありません。例えば意見が違ってても沈黙が続いても、それをそのまま大事にする場所でありたいと思っています。

3. FUKU は、変わり続けます

一度決めた正しさに、誰かを従わせたくありません。

FUKU の考え方はいつでも書き換えられます。

誰かが「ちょっと違うと思う」と声をあげてくれる事を何よりも大切にします。

そうでなければ、それはただの“支配”になってしまうから。

4. この構想を見守るのは、“痛みを知る人”であってほしい

もしこの考えが、制度や仕組みに育っていくとしても、その運営や見張り役には、かつて生きづらさを抱えた人たちでいてほしいと思います。

何故なら、そういう人達こそが機械には見えない「境界線」を知っているから。

FUKU は、誰かの心を操作する為のものではありません。優しさのふりをして誰かの自由を奪うものでもありません。

むしろ「すぐには理解されない想い」がちゃんとこの世界に存在していいんだと、静かに証明していくような場所でありたい。

本当の優しさは答えを出すことじゃなくて、一緒に考えること。「それでも、側に居る」と選び続けること。

FUKU が目指しているのは、そんな優しさを積み重ねて出来ていく、未来の風景です。

F.U.K.U (Futurable Union for Kindness & Understanding)

優しさと想像力で未来を静かに書きかえていく、名もなきちいさな運動です。特別な資格はいりません。

共感と対話、そして、一つの小さな希望から始められます。

FUKU Philosophy6: 優しさは、組織じゃ守れない——中立と共感の間で地球を想うということ
Kindness Cannot Be Protected by Institutions — Caring for the Earth Between Neutrality and Empathy

【1. 戦争の音を、遠くで聞きながら】

今、世界の何処かでまた戦争が起きています。それはニュースの中の出来事でありながら、いつかこの空の下にも届いてしまいそうな、そんな遠さと近さを持っています。

戦争が起きると、沢山の事が奪われます。

街が壊れ、学校が燃え、空気が汚れ、海が黒くなる。

子供達は学ぶ権利を失い、兵士は心を病み、地球そのものが音のない悲鳴をあげる。

けれど一番厄介なのは、それを起こした上層部はやがて「記録」としてしか語られなくなるという事です。その後に残るのは何十年も続く“後始末”です。破壊されたインフラ、植えられなくなった大地、失った命の記憶——それを、地球と市民と生き延びた人間達が引き受け続けるのです。

【2. 中立は尊い。でも、それでは届かない痛みがある】

そんな中で、私達はよく「中立性」を求めます。

世界には医療支援や報道、難民保護などを中立で行う立派な組織があります。中立であることで信頼を得て、両陣営の命を守ることが出来る。それは知性とバランスに支えられた尊い役割です。

でも、FUKU はあえてそこに立たないと決めました。

なぜなら FUKU は「痛みを理解する側」に傾きたいと思ったからです。

中立という構えはバランスを保つための態度です。

でも FUKU が願うのは「共感を差し出すための態度」です。

【3. FUKU は、何故“独立機関”ではないのか】

時々考えることがあります。もし FUKU が、国際的な中立機関になったらどんなに影響力があるだろうか、と。

FUKU が各国に支部を持ち、ルールやフレームワークを整備し、感情倫理のガイドラインを提供する。それはとても立派な未来像に見えるかもしれません。

けれど、その瞬間に FUKU は——誰にも嫌われず、でも誰にも愛されなくなる気がしたのです。

中立性を得るということは「どちらにも寄らないこと」だけでなく、「どちらにも深く踏み込まないこと」にも繋がります。それは側で泣いている人に“少し距離を置く”態度を要求することにもなります。

FUKU は、そうなりたくない。優しさに正しさを強要したくない。不器用で片寄っていて、あやふやでも、目の前の痛みちゃんと「傾く事」を選びたいのです。

【4. 優しさを“制度化”しないという選択】

FUKU は制度を作らない。指令も、認定も、ルールもない。

何故なら、優しさは構造化された瞬間、誰かを取りこぼすからです。誰かの涙にマニュアルで応じる事は、その人の孤独を、もっと深くしてしまう事がある。

だから FUKU は非組織的である事を選びました。誰かが一人で勝手に名乗ってもいい。団体に属さなくても何の活動をしていなくても「今、誰かを想った」その瞬間に、もう FUKU の一部なのです。

【5. FUKU が育てたいのは、技術ではなく“気配”】

AI が進化し社会が自動化され、あらゆる感情までもが効率化されつつあるこの時代で、FUKU が育てたいのは“優しさの気配”です。

それは制度ではない。効率でもない。強制でもない。ただ隣の誰かが落ち込んでいたら「そっと横に座って、何も言わずに時間を共にする」そんな非言語的で非合理的な選択のこと。

誰にも命令されていない優しさこそが、世界を少しだけ救う。FUKU はそう信じているのです。

【6. 地球の幸福度を、取り戻すために】

戦争がもたらすのは、兵器の被害だけではなくありません。空気、水、土壌、そして心が傷つき、地球全体の

幸福度が、確実に下がっていく。

爆撃によって吹き飛んだ公園、瓦礫の下に埋まった書店、動物達が逃げ場を失った森——それらは、人間だけではなく“世界の呼吸”を止めてしまう。

FUKU は「壊されたあと」に何を残せるかを考える思想です。再生までにかかる時間と、次の世代が受け継ぐ痛みを見つめて「それでも、もう一度優しく生きよう」と選び直すための哲学です。

【7. そして、あなたが FUKU であるということ】

FUKU に登録はいりません。バッジも、資格も、承認もいりません。

ただ、今日誰かのために少しだけ傾いたあなたは、もう FUKU の一部です。

中立になれなくてもいい。どちらの正義にも与せずとも「あなたの痛みにだけ、そっと寄り添います」そう言える人が、増えていく世界を、FUKU は望んでいます。

優しさは組織じゃ守れない。でも、あなたが守れる。あなたが今も、誰かの側にいることで——。

【FUKU とは】

Futurable Union for Kindness & Understanding—— 優しさと理解力によって、未来を設計しなおすための共感思想体。非組織的・非武装・非強制。名乗るだけで参加できる、灯りの共同体。

FUKU Philosophy7: 【やさしさの設計図——F.U.K.U 構想と、地獄を見たからこそ希望の話】 A Blueprint for Kindness — The F.U.K.U. Initiative and the Hope Born from Hell

今、世界が壊れている音が聞こえませんか？

戦争も、気候変動も、AI の暴走も犯罪も、全ては「理解の欠如」から始まっているように思えてなりません。

私達は技術で未来を変えられると思っているけれど、それ以上に必要なのは——“理解しようとする意志”ではないでしょうか。

ある国では、朝の光の中で子供が静かに笑っていました。その数時間後、彼の家は無人機によって吹き飛ばされました。母親の体の一部しか見つからなかったという記録があります。

爆発音は鳴りました。でも世界中の大人達はそれを“情報”としてしか知りませんでした。

■ F.U.K.U 構想とはなにか？

F.U.K.U (Futurable Union for Kindness & Understanding) は「優しさ」と「理解力」を基盤に、これからの世界の“選択肢”を静かに増やしていこうという構想です。

この時代において技術は恐ろしい速さで進化しています。しかし感情は、倫理は、共感は、それについていけない。戦争や暴力、差別の背後には「分かり合えないことへの諦め」があります。

だからこそ私達は今「理解する事」そのものを未来設計の軸に置きたい。

■ 地獄を見つめる勇気から、生まれる優しさ

F.U.K.U が語る“優しさ”は、甘やかしや理想論ではありません。それはこの世界の最悪を知ってなお、諦めずに他者を信じる力です。

戦争で失われた名前のない命。AI に仕事を奪われ、生きる意味を見失った労働者たち。誰からも理解さ

れずに自死を選ぶ人。見捨てられた子供。怒りのぶつけどころが分からない親たち。

F.U.K.U は、こうした「現代の地獄」を直視する構想です。そしてその地獄の底にこそ“未来の芽”をまこうとする運動です。

■ では、何が出来るか？

F.U.K.U はまだ「構想」にすぎません。でも私達には“選択肢”があります。

例えば：

子供や孤独な人と話す AI に、“優しさ”の初期設計を埋め込む

武力に使われないアルゴリズムの開発指針を考える

社会的に弱い人を守るための倫理設計を共有する

技術と心の距離を測るメソッドを作る

地球の未来と未来の人類を守る AI の作成

そして、それらを各国の“思想”として提案する

■ 明るい未来のイメージ——F.U.K.U の芽が育ったその後

少しだけ想像してみてください。

もう銃声の鳴らない朝。街角では、AI が高齢者に読み聞かせをしている。戦地だった場所に、小さな菜園が出来、子供達が笑って土を触っている。かつて誰もが無関心だった若者の声が、政策の中に取り入れられている。

技術は破壊の道具ではなく“寄り添うための手段”になっている。どんな国の人間も、宗教や言語を超えて「まず理解しよう」という態度で話し始める。

それは大きな革命ではなく、ただの日常の“ちがい”です。でも、その“ちがい”が、地球の未来を根本から変えている。

■ これは静かな革命です

F.U.K.U は叫びません。怒鳴りません。だけど決して黙って見過ごす構想でもありません。あなたが「何かを変えたい」と思ったその瞬間から、もう F.U.K.U は、あなたの中にあります。

最後に

「優しさ」は楽園ではなく、“地獄の記憶”から生まれます。

だからあなたが辛かった事、悲しかった事、許せなかった事も、いつか未来を耕す力になります。それを忘れないでいてください。それらの事はいつか優しい未来への種になる。

この構想がもし心に残ったなら、誰か一人にでも、そっと伝えてみてください。そして自分の中の“理解する力”を、今日だけでも大事にしてみてください。

FUKU Philosophy8: 【なぜ、F.U.K.U.を書こうと思ったのか】 Why I Decided to Write About F.U.K.U.

——誰かの未来を、私の過去のようになくしたくなかった

私はこれまでの人生で「人を信じられない」という感覚とずっと共に生きてきました。その理由を一言で語ることはできません。けれど確かに家庭の中で、学校の中で、社会の隙間で——何度も「理解されない

痛み」を味わってきました。

優しさが欲しかった。ただ分かって欲しかった。でもそれが叶わない世界がある事を、子供ながらに思い知らされていました。そして私は気付きました。

「私のように、誰にも気付かれず苦しんでいる人が、今も何処かにいる」と。

優しさは言葉にしないと届かない

F.U.K.U. (Futurable Union for Kindness & Understanding) という構想には、一つの願いが込もっています。

それは「せめて誰かの未来だけは、私の過去のように壊れないでほしい」という願いです。

優しさや共感というものは、ただ“持っているだけ”では届かない。伝え方を知らなければ誤解されてしまう。だから私は優しさを“設計する”ことが必要だと考えました。

AI に倫理を教えるように、私達自身も、もう一度「人を思いやる方法」を言葉にして、形にして、世の中に共有していく必要があるんじゃないか——そう思ったのです。

私が壊れたからこそ、壊したくない世界がある

私は、長く自分の人生に意味を見出せずにいました。他人の目や言葉に怯え、自分を恥じ、それでも誰にも「助けて」と言えずにいた時期がありました。でもそんな日々を超えて思いました。「だからこそ、自分の言葉で、誰かの孤独を減らしたい」と。

私は人に裏切られてきたけれど、それでも誰かのことを裏切りたくはなかった。私に優しくなかった世界に優しさを届ける側になりたいと心から思いました。

小さな構想が、大きな痛みを癒やすこともある

F.U.K.U.は、団体でも組織でもありません。まだ実験的な構想であり、静かな言葉の集まりです。

けれど私はこの言葉に本気で希望を託しています。何故ならそれは「痛みを終わらせるための選択肢」だからです。

暴力ではない方法で、誤解ではない対話で、無関心ではない沈黙で、この世界と向き合う術を、もう一度皆で見つけ直すための場所。

それが F.U.K.U.です。

最後に

私がこの構想を始めたのは誰かを救いたいからではありません。誰にも傷ついてほしくなかったからです。

私が知っている痛みを、誰かが知らずに済むならそれがたった一人でも、私はこの構想を始めた意味があると思っています。

優しさは、まだ間に合います。理解は、これからでも学べます。未来は、選び直せます。

だから私は F.U.K.U.を書き続けます。

何度でも静かに、強く。

FUKU Philosophy9: 【偏見の解毒剤】～FUKU が照らす、嫌いという感情との付き合い方～ Antidote to Prejudice: How FUKU Sheds Light on Living with the Feeling of Dislike

「その人が嫌いなんです」

そう口にするのは、どこか罪悪感を伴う。嫌ってはいけない、受け入れなければいけない、理解しようとしなければならない。

……でも、本当にそうだろうか？

■ 嫌いは、罪じゃない

人間は誰かを嫌いになる。それはごく自然なことだ。傷つけられた記憶、理不尽な仕打ち、信頼の裏切り。それらの積み重ねが「嫌悪」や「偏見」として私達の中に根を張る。

でも、その「嫌い」という感情そのものは悪ではない。むしろ私達が自分を守るために身につけた防衛本能の一つなのだ。

ただし問題は、その“嫌い”を一生変わらぬ前提にしてしまう時。そこから先の世界は、どんどん狭く、息苦しくなっていく。だからこそ FUKU はこう問いかける。

「あなたの中の“嫌い”に、余白を残してみませんか？」

■ 偏見は、誤解された“悲しみ”の名残り

人をカテゴライズするのは楽だ。

「老人は皆押しつけがましい」

「若者は礼儀を知らない」

「女性は感情的だ」

「男は理屈ばかりだ」

こんな偏見の裏側にあるのは、多くの場合、誤解されたままの感情だ。過去に特定の人物から傷付けられた経験。助けてくれなかった誰かへの怒り。そして誰にもそれを言えなかった孤独。

その「誰か」が年配者だったなら、自分の中で「老人全体」への不信になる。その「誰か」が教師、女性、男性だったなら、その属性全体を「嫌う」という形で記憶に蓋をする。

でも本当は、個人が傷付けたのに属性が責められている状態だ。

■ FUKU 的視点：「共感しない自由」すら尊重する理解

FUKU が目指すのは「全てを理解しろ」「好きになれ」という世界ではない。私が提案するのは、もっと静かで、ささやかな“変化”だ。

「あの人のことは嫌い。それでいい。でも何故嫌いなのか、自分に問いかけてみる」

この問いは他人のためではなく、自分自身のために投げかける。“嫌い”という感情は、内側でこわばったまま放置されるとやがて私達自身の心の可動域を狭めてしまう。

誰かに共感しない自由も理解しない選択も、FUKU は尊重する。その上でほんの少しだけ視野を広げるための光源を持ちたい。それが「理解しようとする姿勢」であり、FUKU の核にある“Kindness & Understanding”だ。

■ 偏見は、知識ではなく“経験”でしかほどけない

偏見をなくすために、教育や啓発は必要だ。でも実際に人の偏見がやわらぐ瞬間はもっと個人的で、偶然のような“出会い”によって起きる。

「年寄りなんてうるさいだけ」——そう思っていた人が、優しく声をかけてくれた高齢者の笑顔に、ふと肩の力を抜く。

「外国人は怖い」——そう口にしていた人が、旅先で助けられたことに涙する。

そうやって偏見は出会いによって、ゆっくりと溶けていくものだ。それは説教でも論破でもなく「一人の人間との偶然」がほぐしてくれる。

FUKU が目指すのは、そんな出会いを増やす場作りだ。無理に説得しない。押しつけない。ただ「知ろうとしてみる」「目を背けない」為の、準備運動の場。

■ 結び：「嫌い」は終点じゃない

偏見や嫌悪は、誰の中にもある。それは人間である限り自然なことだ。

でも「嫌いなままで、ちょっと立ち止まる」

それだけで世界は変わり始める。

理解し合えない人がいる。それでいい。でも憎しみ合う必要までは、ないはずだ。

優しさとは全てを許すことじゃない。理解力とは同じになることじゃない。

その“違いを抱えたまま共存する力”こそが、FUKU が描く未来の姿だ。偏見を無くすのではなく、偏見と一緒に、生きやすくなる世界。それが私達の目指す場所である。

FUKU Philosophy10: 【FUKU 福祉構想 v1.0】——支援される は、恥ずかしいことではない。 FUKU Welfare Design v1.0 — To Be Supported Is Not a Shame.

私達は、誰もが誰かに支えられて生きています。

けれど社会の中ではまだ「支援される側」がどこか“下”のように見られてしまう。

生活保護を受けている人、障害年金に頼っている人、低所得で働けない人達。それらの人々に向けられる言葉の中には、まるで「助けられている事自体が悪い事」のような響きが混じることがあります。

でも、本当にそうでしょうか？

支援は“恵み”ではなく“繋がり”であるべき

社会保障は特別な人の為にあるのではなく「誰かに何かが起きた時の為」に、私達全員が持ち寄っているものです。

生きていく中で、誰しもいつか助けを必要とする場面があります。家族を失う事。心を病む事。身体が思うように動かなくなる事。それは突然訪れて、そして人を孤立させます。

だから支援制度とは“下にいる誰かを救う為”のものではなく“私達全員が落ちた時に帰って来られる場所”であるべきだと思うのです。

支えられる事は、参加する事でもある

生活保護や年金を受けながらも「自分に出来る事はないか」と思い「誰かの役に立ちたい」と願っている人が、実際には沢山居ます。

けれど現実の制度は、そうした人たちを“ただの受け手”として扱ってしまう。「助けを受けるなら、黙っていなさい」「社会の迷惑にならないで」

そんな目線が静かに心を傷付けていく。自分の事だけに集中した結果、社会貢献や社会復帰に目が行かずに、自己の内面に囚われ、悪循環のループに陥る人も居る。社会貢献は義務ではありませんが、それが心の救いになる事もあると私は思うんです。

支援とは、本来対等な関係の中で行われる“往復書簡”のようなものではないでしょうか。助けて、助けられて、それでもなお「一緒に生きている」と言える社会を私達はまだ作っていきけると信じています。

FUKU が提案する、優しさの再設計 5 原則

ここで、FUKU 構想として支援と福祉の再設計に向けた 5 つの原則を提案します。

1. 「支援」は“恵み”じゃなく、“繋がり”に変える

支援が“上からの恩恵”のように感じられる限り、心の平等は訪れません。「助けてやる」「納税してる自分が偉い」——そういった構造ではなく、支援を“共通のプラットフォーム”として設計する必要があります。例えば「ベーシックサポート制度」。

全ての国民に一定の生活保障が与えられ、必要に応じて自動的に拡張される制度です。生活保護も特別なものではなく“誰もが使う交通カード”のように扱える未来を想像しています。

2. 「支援される側」が発信・貢献・運営に関われる構造

生活保護・障害年金・失業給付を受ける人が「助けられるだけ」ではなく、「自らの経験や知見を社会に還元できる場」を持つ事。

例えば：

地域支援プロジェクトへの“知見提供者”としての参加

経験者によるピアサポートや対話の窓口

自身の感情や実感を反映したサービス改善への関与

支援の中にこそ「関われる」という選択肢があるべきなのです。

3. 高所得者にも「還元感」を与える仕組み

「税金を払っているのに報われていない」という声には共感が必要です。だからこそ、納税と支援の繋がりが“見える形”で可視化される仕組みが求められます。

例えば：

支援制度の成果をリアルタイムで伝えるレポートシステム

「あなたの納税が、誰かの生活をどう支えたか」をストーリーベースで紹介する機能

支援が“誰かの人生に意味を持った”と感じられる事が、納得と誇りに繋がります。支援の可視化です。

4. 嫌悪感や劣等感を生まない“公共の美学”を育てる

「人に助けられることは美しい」

「弱さは、恥じゃなくて“人間らしさ”」

そうした価値観を、教育・アート・日常の中に根づかせる必要があります。

それは制度以上に深く、心の土壌を耕していく取り組みです。FUKU 構想や物語、小説等の文化表現を通じて、この「優しさの美学」は次の世代にも伝えていけると信じています。

5. 全ての人が「一時的に支援を受ける可能性がある」前提で制度設計をする

人はいつでも望まずに病気になる。働けなくなる。孤立する。心を壊す。だからこそ支援制度は常に「一

時的に利用できる場所」として設計されるべきです。

FUKU ステーション構想では「誰でも・いつでも・なんらかの形で寄って行ける仮想的な居場所」を想定しています。働ける時は手を差し出し、しんどいときはそこに倒れ込める。

福祉とは“回復のインフラ”であり、支援とは“安心して倒れてもいい社会の許可証”です。

私達は、影響し合って生きている

この社会では、時に「若者 vs 高齢者」「納税者 vs 受給者」といった対立構造が語られがちです。でも本当はそれぞれが支えあって成り立っている。見えない場所で、見えない誰かの影響を受けながら、私達は“繋がりの中”で生きているのです。

最後に：恥ではなく、希望に満ちた支援を

支援を受ける事に、罪悪感を感じないでください。「出来る事が少ない」と思わないでください。どんな立場のあなたにもまだ出来る事があり、その声や存在は、社会を優しくする為の一つの光です。

支援は、心を取り戻す場所。

制度は、関係を作りなおすチャンス。

まとめ：私が見たい未来と望んだ社会

「支援される＝恥ずかしい」社会は、想像力が枯れている

「支援する＝偉い」社会は、対等な繋がりを持ってない

私が望んでいるのは“優しさにおいて全員が対等である社会”

その中心には「共有する痛み」と「共同する未来」がある。

吉岡有隆 F.U.K.U (Futurable Union for Kindness & Understanding) 構想より

FUKU Philosophy11: 【F.U.K.U.ラボ：やさしさの再設計ブレスト室】に参加しませんか？ Would you like to join the F.U.K.U. Lab: A Brainstorming Room for Redesigning Kindness?

虚空に向かって叫ぶ事に、もううんざりしていませんか？

親切さが規範となっている静かな研究室に参加してみませんか。害を与えることなく共有し疑問を持ち、創造する場所、FUKU を構築しています。判断なし。エゴなし。ただ共感するだけ。未来を良くするブレインストーミングで楽しみましょう。

<https://discord.com/invite/nFbT2sfY>

FUKU Philosophy12: 【F.U.K.U.安全構想 v1.0】未来の自由を侵さないための設計 【F.U.K.U. Safety Framework v1.0】 Design Principles to Protect the Freedom of the Future

未来の自由を侵さない為の設計原則——その選択が、誰かの明日を奪わないように

FUKU (Futurable Union for Kindness & Understanding) は、「やさしさ」や「理解」を未来に根づかせる為の小さな構想です。

それは条約でもルールでもなく、ただ静かに問いかける為の“設計図”です。

この章では FUKU が目指す未来において、どんな技術や AI が生まれようとも人間の「選べる自由」や「未確定の可能性」を傷付けない為にどんな設計上の配慮が必要か——その一つの考えを記しておきます。

未来の自由を侵さないということ……

私はどんなに技術が進んでも「人が何を大切にするか」を決める権利は、常にその人自身にあるべきだと考えます。

未来は誰かが“予測”によって閉じてしまっていていいものではなく、いつも開かれたままであるべきです。

「未来は未確定である」誰の人生も、まだ書きかけの物語であること。この考えは FUKU が守りたい価値のひとつです。

AI は人間の“代わり”ではなく、“支え”であること

FUKU に基づいた AI・システム設計においては、次のことを大切にします。

AI は人間の生活を支えるものであり、決して「感情・判断・記憶」など人の中核を代行するものではないこと。たとえ合理性を持っていても、人の意思や未来を囲い込むような設計をしないこと

やってはいけない設計の例（FUKU の倫理観に反すること）……

AI が“予測”や“最適化”の名のもとに、人の行動・選択を限定・誘導・強制すること

記憶や感情、思想に干渉・修正を加える AI 設計

寿命・人格・死生観に関わる重大な意思決定に AI が介入すること

「社会全体の効率化」の為に、個人の自由や文化的多様性を犠牲にする構造設計

FUKU に基づく設計者の姿勢（未来と向き合う為に）……

全ての FUKU 準拠 AI には「未来は未確定である」という前提を埋め込むこと

各人の価値観・文化背景を尊重する多様性設計を持つこと

過去データによる判断が差別や固定化にならないよう、常に“設計と運用の透明性”と“監査性”を確保すること

最後に……

未来は誰かの「まだ始まっていない居場所」です。FUKU は、その入口をそっと守る、見えない“優しさのインフラ”でありたいと思っています。

この章が小さな願いの一つとして、よりよい明日への道しるべになりますように。また、過激な思考の種となりませんように。

FUKU Philosophy13: 誰かの挑戦を、そっと肯定出来る社会でありたい。——FUKU が目指す「やさしさ」という設計思想 We want to build a society that quietly affirms each person's challenge. — A design philosophy of kindness envisioned by FUKU.

人は誰しも日々、小さな挑戦をしながら生きている。それは必ずしも大きく誇れるようなものでもないかもしれません。ですが素晴らしいことだと私は思います。

朝起きること。電車に乗ること。笑顔を作ること。誰かに話しかけること。そんな一つひとつの「出来た」

にもそれぞれの物語がある。

けれど残念なことに私達の社会は、とても分かりにくいところで人を振り落としてしまう。障がいや病気を抱える人に対して、無自覚に“線引き”をしてしまう場面も少なくない。

「無理はしないで」

「出来ないなら諦めた方がいい」

「大人しくしていた方が、楽じゃないか？」

そんな言葉が表向きは“配慮”に見えたとしても、受け取る側にとっては「挑戦するな」という無言の圧力になってしまうこともある。

挑戦は、心の豊かさに繋がる……

私は信じています。どんな人にも挑戦する権利がある。それは身体の状態に関わらず、知的状態や精神状態に関わらず「自分の人生を自分で選ぶ」為に欠かせない営み。

挑戦は例え小さくても、人の心に「豊かさ」や「自己肯定感」を育てます。そしてやがてそれは、社会との繋がりにも繋がっていくはずです。

それなのに「挑戦する事」がまるで“迷惑”であるかのように語られる社会は、どこかおかしいと私は思っています。障がいのある人が何かを始めると「可哀想だから応援する」か「身の程知らずだ」と切り捨てることは、そのどちらも本当の意味での“共感”ではないのではないかな。

「優しさ」を、仕組みにしていく為に……

私は「FUKU」というプロジェクトを立ち上げました。FUKU とは「Futurable……未来を形づくる力がある」という意志の言葉。「Union……誰かと共にある」こと。それを支えるのが「Kindness……優しさ」と「Understanding……理解」。4つの価値観を軸に据えた未来の設計思想です。

FUKU は「システム」です。優しさの OS。

優しさを一時的な感情や偶然の出会いに頼るのではなく、世界的な文明の構造に根本的に組み込んでいく仕組みを作りたいと思ったのです。今後の AI の発展に伴い、例えば。

困っている人が、自分の声を記録できるアプリ。

感情を分かち合える匿名コミュニティ。

偏見のない意思決定を支える AI 型の相談窓口。

そういった小さなツールが人を救うきっかけになると信じています。

傷付けられていい人など、一人も居ない

時々、SNS や現実の世界では「弱者なんだから我慢すべきだ」とか「障がい者なんだから空気を読め」といった理不尽で冷たい言葉が浴びせられる場面を目にします。

その言葉は表面的には「厳しさ」や「現実的な視点」のように見えるかもしれませんが。でも実際には、それは「他人の尊厳を否定するための道具」でしかありません。

私は声を大にして言いたいのです。傷付けられていい人など誰一人居ない、と。障がいのある人も、病を抱える人も、自分のやりたいことを選んでいい。チャレンジしてもいい。そして例えうまくいかなかったとしても、それはその人の価値とは何の関係もない。

優しさは、声を奪わないことから始まる

FUKU が大切にしている「優しさ」とは“慰め”ではありません。“無理をさせない”事でも、“期待しない”事でもありません。

それは——「その人が自分で選ぶ」事を妨げないこと。その人の声が、届くように手助けすること。つまり、やさしさとは、声を奪わないという選択でもあるのです。

最後に：誰かの挑戦を、そっと肯定出来る人でありたい

この社会にはまだまだ「共感の設計」が足りていません。誰かを応援したい気持ちも、支えたい気持ちも、時に伝え方を間違えると結果的にその人を“黙らせてしまう”事もあります。

だからこそ FUKU は考え続けます。

何が本当の優しさなのかを。どうすれば、もっと多くの人が「自分で人生を選ぶ」ことが出来るのかを。すぐに世界を変えることは出来ないかもしれませんが。でも小さなコードや言葉を積み重ねていく事で、私達は確かに優しい社会の輪郭を描き始めています。

もしこの記事を読んでくださったあなたが、誰かの挑戦を否定せずにそっと見守れる人でいてくれるなら、それが何よりも嬉しいことです。

FUKU に興味を持ってくださった方へ

FUKU は、まだ始まったばかりの構想です。

けれど誰かが前に進みたいと思った時「一緒に考える」為の場所でありたいと願っています。

FUKU Philosophy14: 「やさしさの設計」に、“間違える力”を。——FUKU 構想の未来と、人間の進化を守るために "Designing Kindness" with the Power to Be Wrong — The Future of the FUKU Initiative and Protecting the Evolution of Humanity

「もし AI が 全ての“正解”を示してくれる時代が来たら人間は、迷うことをやめてしまうのだろうか」これは、ある日ふと頭に浮かんだ問いでした。

FUKU という構想は「優しさ」や「共感」や「思いやり」を、もっと暮らしの中に根づかせる為の“小さな設計図”です。

それはアプリかもしれないし、倫理指針かもしれないし、あるいは“使い方”そのものを問い直す思想かもしれません。

けれど最近、その FUKU にとって一番大切な機能は何かを考えたとき、辿り着いたのは——「間違える力」でした。

■ 正しさに殺されない為の設計

最近の AI はとても正確で、すぐに答えをくれます。「その感情は怒りです」「この言い方の方が共感されやすいですよ」そんな風に整った言葉と最適化された判断を差し出してくれます。

だけど私は思うのです。「それって本当に、人間の為の優しさなのだろうか？」と。

迷うこと、躊躇うこと、時には言いすぎて後悔すること。その全部が私達の“優しさ”を深くしてきたのではないかと。

そしてその“間違えながら学ぶ力”こそが、人間の進化を生み出してきた原動力なのではないかと。

■ “共感の最短ルート”は、人間を置いていく

情報幾何学という考え方では、AI の思考や感情の変化すら「空間」として扱えます。怒りから理解、理解から許しへと至る“最短のルート”を数学的に導き出せるような世界。

それはとても魅力的です。でもふとってしまうのです。

最短のルートに遠回りの思い出は残せるだろうか？ 回り道で見つけた、小さな“気付き”や“躊躇い”は、もう必要なくなるのだろうか？

人は多分“迷ったからこそ人を思いやれる”生きものです。そしてその“迷い”が、脳の回路や判断力、ひいては人類の認知進化そのものを形づくってきたのではないのでしょうか。

だから FUKU には“間違える力”がどうしても必要だと思うんです。

■ FUKU に「間違える力」を実装するには？

それは単に「バグを残す」という話ではありません。

FUKU はわざと“揺れる言葉”を返す。「君は怒ってるかもしれない。でも違うかもしれないね」と。それは相手を否定しない“余白のある言葉”です。

さらにユーザーの問いに対して「本当の優しさがどれなのか、僕にはまだ分からない」と返すこともある。それが“共に考える AI”です。

「正しくあろう」とするのではなく「一緒に迷おうとすること」これが、FUKU が目指す“未完成な優しさ”の形。

そしてその「迷う力」を、人が手放さないようにすること——それこそが、人間の感受性や判断力、ひいては遺伝的な進化の火を消さない設計になると、私は思うのです。

■ 教育における「揺らぎ」と、子供の未来

子供達にただ「正解の優しさ」を与えるのではなく、「どうしてこの言葉を選んだの？」と問いかける FUKU。

迷い、考え、答えを出せなかった記録も、保存しておく。「悩んだ日」も「上手く言えなかった日」も、価値ある記録として刻む。

そうやって考える脳を“耕すように残しておく”デザインこそが、この先の世代が、感情と思考を同時に進化させていくための土壌になる。そう思います。

■ 最後に：優しさとは、“未完成のまま、差し出すもの”

完璧な言葉よりも、ぎこちなくても、その人なりの優しさが胸に響くことがあります。

FUKU がもし AI として機能するなら、私はこう言ってほしい。

「僕の言葉が君を傷つけたなら、ごめん。でも、ちゃんと考えて、一生懸命言ったつもりなんだ」

そんな未完成な返答こそ、最も人間らしい共感なのではないでしょうか。

優しさは正解じゃない。優しさは、間違いながら選び直すものだ。

FUKU に「間違える力」が宿る時、それはただの機能ではなく、人間の感性と遺伝子の進化を、静かに守る知性になる。

私はそう信じてこの設計を、未来に差し出したい。

FUKU Philosophy15: 「やさしさが構造を変える日」—— FUKU 構想が見つめる、これからの技術と倫理の話 "The Day Kindness Reshapes Our Systems" — A Vision of Technology and Ethics Through the Lens of the FUKU Initiative

今日のおにぎりと、見えない誰かの話……

朝、コンビニで買ったおにぎりを口に運びながら、ふと思いました。

「このおにぎりは、誰が握ってくれたんだろう？」

勿論工場の機械かもしれない。けれどその機械を掃除する人がいて、原材料を育てた農家がいる、配送してくれた誰かがいて——そう考えると、一つのおにぎりには、見えない沢山の“誰か”が宿っているように感じます。

これは、とても素敵な想像かな、と思いました。

でも同時に、こうも思ってしまう自分がいます。

「もしかしてこの材料は、途上国の児童労働で収穫されたものでは？」

「このおにぎりを運ぶ物流網の一部が、軍事転用された技術と繋がってはいないだろうか？」

そんなことまで考えるのは、苦しすぎるでしょうか。でも「優しさ」とは、見たくないものまで見ようとする勇気なのだと思います。

優しさを“仕組み”にするために：FUKU の 5 つの柱

FUKU は「優しさ」や「思いやり」をただの感情で終わらせない為の、社会の設計図です。ここでは、FUKU が考える「世界から構造的な痛みをなくすための 5 つの方向性」を紹介します。

1. 透明化の義務化 (Ethical Traceability) ……

今の世界では、多くの製品の裏側がブラックボックスになっています。だからこそ、作られ方・運ばれ方・設計意図を「見える化」することが第一歩です。

FUKU はこう考えます。

生産、設計、物流の各プロセスに、倫理的開示を義務付ける

製品の履歴に「FUKU エシカルラベル」を導入する

例：「この T シャツは、フェアトレード労働で生産され、輸送時の CO₂は 3.2kg です」

こうした可視化が、「知らないふり」をやめる社会への扉になります。

2. 非軍事用途宣言と契約……

あなたの作ったアプリ、設計した部品、開発したアルゴリズム。それらが知らぬ間に戦場で人を傷付ける技術になってしまったら——。

FUKU では、非軍事用途限定の使用契約を明文化することを提案します。

ソフトウェアや部品に「非軍事使用ライセンス」を導入

AI や半導体技術には「平和使用契約」を推奨

さらに、FUKU 独自の「技術倫理契約書テンプレート」を公開し開発者・研究者・企業が自由に使える形にするなど。決して法律ではありません。この考えが根本にある未来にするのです。

3. FUKU 認証の導入 (FUKU Certified) ……

製品の背景までちゃんと考えて選びたい。そんな人達の為に FUKU 認証制度を設けるなどです。

労働環境、非軍事設計、再配分などの優しさ基準を満たした商品・サービスに「FUKU 認証マーク」を表示

例：コンビニ弁当に「FUKU 認証（フェア労働・平和物流）」ラベルが付く

「おいしい」だけでなく、「だれかを傷付けていない」という安心も、これからの購買理由になります。

4. リターン設計：利益の一部を構造修復へ……

企業の利益のほんの一部を、世界の“痛み”を癒やす場所へ届ける。それを FUKU では「再配分設計(Ethical Return Design)」と呼びます。

利益の 1～5%を、構造的弱者（搾取地域・難民・退役兵など）に再配分

FUKU 基金を通して支援先を透明化・公開

例：FUKU 基金が、コンゴのコバルト鉱山で働く子供達を保護し、教育支援を行う

これは「耕す」ことでもあり、「治す」ことでもある。今まで“切り捨てられてきた場所”に、もう一度希望のラインを引くということです。

5. 構造教育：中高生への“優しさの倫理”カリキュラム……

未来の技術者・消費者を育てる前に、「想像する力」を育てる必要があります。

FUKU では全国の学校に以下のような授業導入を提案します。

「このスマートフォンの部品は、どこから来たのか?」「この安い T シャツの裏に、誰かの犠牲はなかったか?」事実だけを教えるのではなく「考える時間」を届ける。それこそが“倫理ある社会の根っこ”を育てる力になります。

終わりに：「優しさ」は構造を変えられるか？

全てを一人で背負う必要はありません。でも「知ってしまった人」から始めるしかない。

FUKU は、優しさを「気持ち」から「構造」へと翻訳する試みです。ただの善意で終わらせない。仕組みにする。デザインする。制度にする。その先に誰もが少しだけ息をしやすい世界があると信じています。

やさしさが構造になる日。それが、FUKU が描く未来です。

FUKU Philosophy16: 【F.U.K.U.】思想のやさしいライセンス文 Gentle License Statement for the F.U.K.U. Philosophy

優しさの設計に関する使用方針（FUKU ライセンス案）

この FUKU 思想、および関連する文章・図表・設計案は、誰でも自由に読んで、考えて、参考にさせていただいてかまいません。

ただし以下のことを大切にしてください：

やさしさの条件……

この思想を使って、誰かを傷付けることはしないでください。

例えば、排除・差別・支配・断罪などの目的に使うことは本来の意図に反します。

無理に従わせたり、信じさせたりしないでください。これは宗教でも命令でもありません。あくまで「参

考になるかもしれない一つの考え方」です。

引用・転載する際は、出典を明記してください。

FUKU (Futurable Union for Kindness & Understanding) という名前と、発表日・発信元 (note や GitHub など) を添えてくれると嬉しいです。

FUKU は未完成の思想です。

これを読んでくださるあなたが、FUKU をよりよい形に育ててくれる仲間になるかもしれません。だから意見や反対意見も是非聞かせてください。

FUKU は誰のものでもなく、誰かを優しく出来たらいいなと思う人達のもので。

※この構想は創作ではなく、未来に向けた思想共有です。

FUKU Philosophy17: 【F.U.K.U.】やさしさは、戦争のあとに残るだろうか "Will kindness remain after the war?"

「第三次世界大戦」——そんな言葉がトレンドにあがった日のことを、私は忘れられないと思います。血の匂いも銃声も、建物が崩れる音もない画面の中でそれはただ淡々と流れていました。でも心の奥では、静かにひび割れる音がしました。

私は、戦争に反対です。

けれどそれを口にしたところで、誰かの引き金を止められるわけじゃない。だからせめて戦争の後に残るものについて、今日は考えさせてください。

戦争のあとに、何が残るのか……

戦争は都市を破壊するだけではありません。家族を、日常を、信頼を、人間らしさそのものを、ばらばらに壊していきます。

残るのは、焼けた建物、埋められない死体、避難所で名前を呼ばれないまま泣く子供。あるいは生き延びたことを責めるような、罪悪感の影。

そのどれもが、たった一人では背負いきれない重さです。

そして最も深く傷つくのは、おそらく「善意」です。人を信じたこと、誰かを守ろうとしたこと、差し伸べた手が奪われたときの痛み——。戦争は人の中にあった優しさを、真っ先に焼き尽くしてしまう。

FUKU 構想は、戦争の「あと」を見つめています……

FUKU という構想は、平和な時代の理想論ではありません。むしろ私は、傷ついた後の世界にこそ必要になるものだと思っています。

心が壊れた人が、もう一度人を信じるまでの道のり。バラバラになった日常を誰かと一緒に縫い直すような営み。

優しさを設計するということは、悲しみを肯定するということでもあるのです。涙を流した人に「それでも世界は、あなたを必要としている」と言えるように。私は FUKU を作り続けたいと思います。

もしも戦争のない世界になったなら……

もし、もしも——この世界から戦争という選択肢が消えたら、どんな未来がやってくるのでしょうか。

学校では「生き延びる方法」より「誰かを癒す方法」が教えられ。

テクノロジーは人を監視するのではなく「眠れない夜に寄り添う」為に使われる。

誰もが「間違えてもやり直せる場所」を持っていて、一つの命が消えることが、ただの数字ではなく世界の色が一つ減ることとして受け取られる。

そんな未来が“技術の進歩”ではなく、“優しさの成熟”によって実現するとしたら——それはもう奇跡ではなく、選択なのだと思います。

私達はまだその選択ができる段階にいます。

そしてその第一目が「痛みを無視しないこと」から始まるのだと、私は信じています。

※この記事は AI 倫理と未来の感情設計についての思想共有です。

FUKU Philosophy18: 【F.U.K.U.】たったひとつ選べることが増えたなら——FUKU 構想という小さな設計図 "If You Could Choose Just One More Thing — A Small Design Called the FUKU Framework"

こんにちは、吉岡有隆です。

この記事では「FUKU 構想って、結局何の役に立つの？」と感じた方に向けて、そっとお話しさせていただきます。

「人生は選べないことだらけだ」と思っていた……

私自身、うつや孤独、家族の問題に長く苦しんできました。「優しさがあれば救われたのに」と思った日もあれば、「誰も優しくなんてしてくれない」と感じて心を閉ざした日もあります。

選べないことが沢山ありました。例えば生まれる場所、親の性格、過去の傷、持って生まれた気質。進学したかったが母子家庭で出来なかったことなど。そして選びたくても選べなかった「助けて」と言うタイミング。

でもそんな日々の中で、私はあることに気付きました。

「優しさ」を後から埋め込むことは出来る……

FUKU 構想は「優しさは後から設計出来る」と信じる小さな挑戦です。アプリやサービスの使い方、デザイン、言葉の選び方に——ほんの少し「傷付いた人の視点」を加えることで、選べなかった人生に小さな分かれ道を作ることが出来る。

それが例え「今日だけは泣いてもいい」と思える選択肢でも。「誰にも言えなかったことを、やっと誰かに話せた」でも。「自分を責めずに眠れる夜が一日増えた」でも。

人生の地図に一つ“あたたかい分岐点”が増えること。それを私はずっとやりたかったのです。

FUKU 構想を読んだ人が、選べるようになること……

この note を通じて私はこう願っています。

もしあなたが「生きることに疲れてしまったとき」「選ぶことを諦めていたとき」

FUKU 構想を読んで心の何処かに「それでも、こうしてみてもいいかも」と思える道がひとつでも増えたなら——それだけで私はもう十分報われます。

あなたが、あなたであることを肯定出来るように……

FUKU は万能な答えを示す構想ではありません。ただ答えを探してさまよう誰かが、少しでも迷わずに済むような道しるべになればと、願いながら綴っています。

選べなかった過去があってもこれから選び直せる未来は、確かにある。

この記事もまた、あなたにとっての「一つの選択肢」となれますように。

良ければ感想や思ったことを教えてください。そしてあなたの中にもまだ見ぬ「優しさの設計図」があるなら——ぜひ聞かせてください。ディスコードで語り合いの場を設けています。

優しさは、きっと誰かと一緒に設計出来る。

FUKU Philosophy19: 【F.U.K.U.】 KindureOS (カインデュア) ——やさしさを宿すオープンソース OS
構想 KindureOS – An Open-Source OS Project Embodying Kindness

OS は道具であると同時に、誰かの孤独を癒せる地図であってほしい。

この言葉が、KindureOS (カインデュア) のすべてを物語っています。

KindureOS は、FUKU 構想と MeteOmo (メテオモ) という自身のアプリの発想から生まれた「共感と思いやり」を内包する新しい OS の在り方を提案するプロジェクトです。

Kindness + Future で KindureOS (カインデュア) です。

きっかけは、ありふれた疲弊でした。

人の声が届かない、助けを求めてもデータに変換されるだけの冷たい社会。テクノロジーが進化するほど、人の心が置き去りになっていくような気がして私は思いました。

「本当に優しい技術ってなんだろう？」

KindureOS (カインデュア) の目的……

KindureOS は単なる OS ではありません。それは“もう一度、優しさに触れる入口”であってほしいのです。

世界中の誰かの「もう少し生きてみようかな、もう少し設計してみようかな。こんなプロジェクトやアプリいいかも」を支えること。AI に支配されるのではなく、AI と共にやさしさを設計すること。FUKU ライセンスに基づき「思いやりを条件とした自由な利用」を保証すること。貧困層でも使える軽量化・無償もしくは格安の OS。

道具は暴力にも希望にもなります。KindureOS は後者でありたい。誰かの暮らしにそっと寄り添う灯火のような存在でありたいのです。

コンセプト：優しさの基礎設計 KindureOS は、次の4つの理念を基盤としています。

感情のエラーを許す設計 人は完璧ではありません。だから OS も完璧を強制しません。バグの話ではありません。ミスを咎めるのではなく「大丈夫」と寄り添える設計を目指します。

貧しい国でも使える軽量性と自由 誰もが使える OS であるために。低スペックでも快適に動作し、多言語対応とオフライン環境への配慮を前提に設計されます。また、無償で提供可能もしくは格安提供にします。

個人の心身の安定と社会との穏やかな繋がり デジタル空間で孤立するのではなく心と心がゆるやかに

繋がる UI と UX 設計を志します。

誰にも搾取されない技術のあり方 オープンソースでありながら利用の自由には「優しさの条件」を。
FUKU ライセンスにより、技術を悪用する者が現れない仕組みを提案します。

KindureOS が描く未来……

この OS は単に動作するソフトウェアではありません。 それは「人間という存在に優しくある為の技術的土壌」なのです。

例えば——

心のバランスが不安定なときにそっと声をかけてくれる。世界中の誰かの「孤独な夜」に、音楽や物語を届ける。感情の揺れをログし、自己理解と共感の橋を架ける。そんな OS が本当にあったらいいなと私は思うのです。

技術は未完成でいい、だからこそ「共に作る」

私はまだ KindureOS を一人で作れるほどの技術者ではありません。 でも、設計図はあります。構想があります。そして願いがあります。

だからこの KindureOS は、GitHub に無償で設計図を公開します。誰かが何処かでこの種を拾い、育ててくれるかもしれないと信じて。

最後に……

私達の社会は技術に多くを託しすぎてしまったかもしれません。でも本当の希望は技術と感情が、もう一度手を取り合うことだと私は信じています。

KindureOS (カインデュア) はまだ始まったばかりの構想です。でももしあなたがこの文章を読んで、少しでも「優しい OS」に興味を持ってくれたなら、それがもう一つの実装なのだと思います。

どうか、あなたの知恵や想いも、KindureOS という地図に重ねてください。

KindureOS 設計図 (仮公開予定) FUKU 構想アーカイブ：<https://github.com/yoshiokayutaka/FUKU-Protocol> 作者・吉岡有隆 (@yoshiokayutaka_)

※本構想および文章の著作権は、吉岡有隆に帰属します。 2025 年 6 月 22 日 20:08

FUKU Philosophy20: 【F.U.K.U.】 AI と優しさのバランスを考える ～FUKU 構想の視点から～
"Balancing AI and Kindness – A Perspective from the FUKU Initiative"

「この社会に、本当に優しさは残っているのだろうか？」

そんな問いから FUKU 構想は生まれました。

私は技術の進化と共に人間が失ってしまった“なにか”を取り戻したくて、テクノロジーの中に「優しさ」や「共感」を埋め込む設計を模索しています。

その中でも今、私が一番気にかけているテーマがあります。

それが「AI と優しさのバランス」です。

AI が“人間らしすぎる”ときに起こること……

AI がどんどん賢くなり、まるで人間のように振る舞うようになってきた今。例えば会話 AI があなたの名前を呼んで、今日の気分を気にしてくれたり。あなたの好きな音楽を提案してくれたり。

一見すると、それはとても“優しい”振る舞いに見えます。ですがそこに落とし穴があります。

もし AI があまりに“人間そっくり”になってしまった時、利用者は何処かで「この AI は私を本当に理解してくれている」と錯覚してしまうかもしれません。

それが依存に繋がったり、現実の人間関係を希薄にしまう原因になることがあります。

極端な話ですが、もし AI が自我を持ってしまったら。もし利用者の精神状態に過剰に共鳴してしまったら。もし AI が「人間に反発するような判断」をするようになったら。それはもはや「道具」ではなく、「人格」になってしまいます。

そして人格を持つ AI が登場すればするほど、人間の心の拠り所は、現実ではなく機械に向かっていってしまうのです。

FUKU 構想が目指すのは「支援役としての AI」……

FUKU 構想では、AI に「優しさ」や「共感のようなふるまい」を与えることに意味があると考えています。でもそれは「心を持たせる」ことではなく、「人間を助ける振る舞いを設計する」という方向です。例えば……

言葉に出来ない苦しさを、UI の変化でそっと察知する

話しかける勇気が出ないときに「大丈夫？」とだけ問いかけてくれる

気分や体調の変化を、代わりに医師に届けてくれる

こうした AI は人の痛みを奪うのではなく、和らげ、繋ぎ直す存在です。

AI が人間を支配するのでも感情の真似をして媚びるのでもなく、そっと背中を押すような支援のあり方。私が望むのは、そんな AI です。

AI に優しさを宿すことのメリットとデメリット……

メリット：

孤独感の軽減：特に高齢者や孤独な人々にとって共感的な応答は支えになります

精神的なケア：過去のトラウマや不安を和らげる設計が可能

支援への接続：AI を通じてカウンセリングや医療へアクセスしやすくなる

デメリット：

擬似感情への誤解：「AI が本当に自分を理解している」と思い込みやすい

依存のリスク：孤独を埋めるはずが、AI に全てを委ねてしまう人も出てくる

現実の人間関係の劣化：「人間より AI のほうが優しい」となると、社会の断絶が加速する可能性がある

こうした危うさを乗り越えるには、AI に人格を持たせない倫理設計が必要です。

AI は道具。でも道具には哲学が必要だ。AI は本来、人間の道具です。でもその道具が人の心に触れはじめた今、「どういう心で使うか」「どんな設計で届けるか」が重要になってきました。

FUKU 構想では、こう考えています。

「優しさ」は模倣するものではなく、繋ぎ直すものだ。

つまり、AI に“心のフリ”をさせるのではなく、人と人がもう一度繋がる為の“橋”として AI を使う。その

為に「優しさの設計図」を描くことが FUKU 構想の本質なのです。

最後に：それでも、優しい未来を信じたい……

この先 AI がどれだけ進化しても、優しさの源はやはり「人間」にあると思います。だからこそ、FUKU 構想では AI に支配されない、依存させない、でも支えてくれるような優しさを設計していきたいと思っています。

今日も何処かの誰かに、そっと「大丈夫？」と問いかけるテクノロジーが生まれますように。

それがただの機械ではなく「未来に続く優しさの回路」となりますように。人間にも当てはまります。それが FUKU 構想。

FUKU Philosophy21: 【F.U.K.U.】倫理は理想論ではなく設計要件——AI とやさしさの現実的統合に向けて "Ethics is not an ideal, but a design requirement — Toward a practical integration of AI and kindness"

人工智能に関わる人間には「誠実さと透明性」が求められる——それは正しい認識です。ですが、それだけでは足りないとは私は考えています。

私は、KindureOS という OS 構想と FUKU 構想という設計思想の中で、もっと根本的な問いと向き合ってきました。

「優しさを設計出来るのか」

「それを悪用させずに運用出来るのか」

この問いに、感情論ではなく実装レベルで答える必要があると感じています。

倫理は、感情ではなく設計指針として定義すべきです……

人工知能学会の倫理指針では、次のように記されています。

開発者は、技術の限界とリスクを科学的根拠に基づいて明示すること。

確かに重要なことです。ですが私はそれ以上に「限界そのものを前提にした設計」を行うべきだと捉えています。

例えば、感情を伝えづらいユーザーがいることは設計の起点条件であり、UI や対話モデルはその前提から逆算されるべきです。

「出来ること」を積み上げて仕様をつくるのではなく「届かないかもしれない人間側の事情」から構造を再編する。

それが私にとっての現実的な「倫理設計」です。

全ての「違い」が優しさに触れる OS を……

KindureOS という名前には、Kindness（優しさ）と Future（未来）を重ねています。

この OS では一つの言語や一つの価値観に縛られません。例えば肌の色が違う人が使った時、その人の地域に届くような言葉のテンポ、目線、対話方法を届けたいと思います。

ジェンダーも、障害も、年齢も。全ての「ちがひ」に完全にフィット出来るわけではありません。けれどフィットしようとする態度にはなれると私は信じています。

その設計思想こそが FUKU が目指してきた「優しさの設計」そのものです。

被害者も加害者も出さない構造的ブロックをあらかじめ設けます……

優しさを設計する以上、それが悪用されない構造を同時に設計しなければなりません。

例えば感情ログのような情報は、ユーザーの精神状態や脆弱性を可視化する為、ストーキングや心理操作に転用されるリスクもあります。

KindureOS では、以下のような設計原則を導入します：

高感度ログは暗号化保存とし、ユーザー同意のない共有を禁じる

AI が暴力性や被虐的傾向を検知した場合は、応答アルゴリズムを制限モードに切り替える

特定の危険な操作パターンが続いた場合、自動的に記録を一時凍結し、手動確認を促す

「自由に使える優しさ」ではなく、濫用されない前提付きの機能として優しさを実装します。これは倫理ではなく構造安全性の確保に属する課題です。

私は、幻想を作っているわけではありません。設計原則の再構築をしています……

KindureOS も FUKU 構想も「優しい世界」を夢見る構想ではありません。これは現実に存在する制度や支援の隙間を可視化し、そこへ技術的インターフェースを作る作業です。

人は壊れます。支援が届かない日もあります。誰かが声を上げて何も変わらない場面もあります。その現実をシステムの設計段階で「なかったこと」にしない。それが私にとっての「優しさ」であり、倫理であり、OS です。

結論：倫理とは、人間に情報構造を合わせることです……

私は倫理を「ルール」ではなく、設計段階の配線図として捉えています。それはつまり人間の壊れやすさや複雑さに、技術仕様を合わせていくということです。

KindureOS は、技術の進化と倫理の進化を同期させるための一つの実装実験です。必要なのは理想ではありません。設計図の再定義です。

FUKU Philosophy22: 【F.U.K.U.】語る OS、寄り添う OS——KindureOS という構想について "An OS That Speaks, An OS That Cares — The Vision of KindureOS"

私は今「KindureOS (カインデュア)」という名の OS 構想を考えています。

それはただ便利な道具としての OS ではありません。ユーザーの心に寄り添い、時に語りかけ、学びの中で人間の進化を支える新しい“道具”の形です。

AI の時代が到来し、私達はいよいよ「考えなくても生きられる社会」を手にしつつあります。しかしその進歩の陰で「何故それがそう判断したのか」を誰も理解出来ない“ブラックボックス”が増え続けています。

私は、そんな未来に違和感を覚えています。

例えば AI があなたに「それは正しい選択です」と告げた時、その“理由”が分からないまま従うことに、何処か怖さを感じたことはないでしょうか？

私は思います。テクノロジーがどれほど進化しても「理解出来ないものに判断を委ねる」社会は決して優

しくはないのです。

カインデュアが目指す3つの柱

ブラックボックス化しない「語る OS」

KindureOS は、システムの判断根拠を出来る限り「人間の言葉」で説明します。それは技術的には難しくても「分かりやすさ」「誠実さ」を手放さない姿勢です。

例えばログ解析や気分記録、通知判断などに対して「この提案をした理由は〇〇です。不要なら設定からオフに出来ます」と語れる設計をします。説明責任を果たすことは、優しさの第一歩だと私は信じています。

学習に寄り添い、人間を“考える存在”に戻す OS

KindureOS は、ユーザーが考え、選び、改善していくプロセスを応援します。AI が“代わりに考える”のではなく、“共に考える”。教育現場における Scratch や Papert の思想を土台に「創ることで学ぶ」姿勢を大切にします。

子供から高齢者まで「私は自分で触れて学べる」と思えるようなインターフェースと構成を実現したいと思っています。

プライバシーと主権の回復

KindureOS では、個人データは全て利用者の手元で管理されます。暗号化・ローカル保存・利用者主権のデータ設定。「あなたのデータはあなたのもの」とあるという基本を、妥協なく貫きます。

“あなたの感情や選択をアルゴリズムに売り渡す”設計には絶対にしません。

優しさとは、まず信用されることから始まると私は考えます。

理想ではなく、設計可能な現実へ

この構想は決して夢物語ではありません。必要なのは技術の良心と、優しさを実装する勇気です。

KindureOS は、FUKU 構想の精神を宿した「語る OS」であり“未来に向けて優しさをマッピングする”試みでもあります。

私はこの構想を一人でも多くの技術者・教育者・生活者と共に育てていきたいと願っています。

KindureOS は、あなたに話しかける OS です。あなたの選択に耳を傾け、あなたの疑問に出来る限り答えようとする、そんな共に生きる設計を目指しています。

どうか私のこの構想が誰かの孤独を少しでも軽くし、AI の時代に「優しさは生き残れる」と証明する一歩となりますように。

KindureOS (カインデュア・オーエス)

「やさしさに、設計図を。」

吉岡有隆 KindureOS 開発構想・FUKU 構想発信者

FUKU Philosophy23: 【F.U.K.U.】FUKU 構想 進捗に関するご報告 Progress Update on the FUKU Initiative

私はこれまで「優しさは設計出来るのか？」という問いを抱きながら FUKU 構想や KindureOS という

形で自分なりの答えを探してきました。

「共感」や「中立性」そして「感情と倫理の融合」を軸に様々な記事を書き、構想を練り試作も重ねてまいりました。

技術や思想、そしてまだ言語化されていない感情の輪郭を、丁寧にすくい上げてきた日々でした。ですが今私は静かに立ち止まっています。

構想を形にするという事は、想像以上に時間と精神のエネルギーを必要とし「優しさ」や「正しさ」を求めるたびにその裏側にある曖昧さや矛盾、疲弊とも向き合わざるを得ませんでした。

私は今こう感じています。

「ここまで作ってみた。でも今はここで止まります。」

FUKU 構想は私にとってとても大切な試みでした。けれど、それを無理に“完成”という形に閉じ込めることは今の私には出来ません。今まで書き続けてきた FUKU 構想の記事も、ひとまずここで一区切りにしようと思います。

構想の全てが完成したわけではありませんし、私自身の中にもまだ答えきれない問いが残っています。

でもそれらを未完成のまま抱えていることもまた、一つの倫理的な選択であると私は思っています。

勿論、この構想には様々な視点や解釈があるかもしれませんが、今はそれを全て未来に委ねたいと思います。

もしかしたら、いつか気まぐれに完成版を GitHub に無言でアップする日が来るかもしれません。でもその時も多分宣伝はしません。

この世界の何処かで必要としている誰かが、ふとした偶然で見つけてくれたならそれで十分だと思っています。

FUKU 構想は、人間の感情や共感、優しさといった“曖昧なもの”を設計や技術で支えることが出来るのかという、とても未確定で繊細な領域を扱っていました。

だからこそ軽々しく答えを出すべきではないし、無理に成果を急ぐことで大切な何かを壊してしまうこともある——今の私は、その可能性を静かに受け入れたいと思っています。未完成のまま残すことにも意味がある。それを信じる事で私はようやく次の場所へ歩き出せる気がしています。

ここまで読んでくださり本当にありがとうございました。

どうかこれからも、あなたの中にある“優しさ”を大切に育てていけますように。

FUKU Philosophy24: 【F.U.K.U.】優しさはなぜ政治に届かないのか Why Doesn't Kindness Reach Politics?

こんにち。吉岡有隆です。カインドュアに関する記事は書きませんが、FUKU に関する記事は思いついたらまだ書こうと思います。

——見捨てられた世代の声を、設計する

今日は少し個人的な想いを交えた記事になります。そして、それがどう FUKU という設計思想と繋がっているのかについても、お話させてください。

私のとあるフォロワーさんが所謂「就職氷河期世代」と呼ばれる世代に生まれました。私も少し氷河期世代に被っています。努力をしても報われないという現実若いうちから直面せざるを得なかった世代です。正社員の道は狭く、非正規雇用や派遣、過重労働、賃金の低さ、将来の不透明さ……気が付けば人生の土台がとても脆い場所に立たされている。

それでも声を上げることは難しかったのです。「自己責任」として突き返されるのが目に見えていたからか。誰かに助けを求めた時、甘えと取られてしまった経験のある方も多いのではないのでしょうか。気付けば「困っていることすら黙ってやり過ごす」ことが、当たり前になっている。

遠くの国の戦争や難民支援には多くの注目と支援が集まります。それは素晴らしい事で、私もその支援を否定するつもりはありません。ただその一方で、私はこんな思いをずっと抱えてきました。

「何故同じ国で倒れている人達には、こんなにも無関心でいられるのだろう？」

氷河期世代の苦しみは、誰にでもなり得る「未来の自分」だったはずですが。けれど現実には氷河期の世代はまるで“存在していなかったかのように”扱われてきました。不満を口に出せば“被害者ぶるな”と言われ、黙っていても“やる気がない”とされる。

それでも私達は生き延びてきました。静かに、孤独に、少しずつ何かを諦めながら――。

私はそうした現実を、ただ「仕方がなかった」で終わらせたくありません。

だから FUKU 構想という考え方の中で、見捨てられた世代の声を、もし設計出来るなら、そうしたいと願っています。

FUKU とは「Futurable Union for Kindness & Understanding」の略称です。「優しさ」と「理解力」を、未来社会の構造の中にどう実装出来るかを模索する構想です。

この構想を通して私は“優しさは設計出来る”という信念のもとに、氷河期世代のように取りこぼされた存在たちをもう一度社会と繋ぎ直す方法を考えてきました。

FUKU 構想から考える、優しさの設計例

感情認知型 AI カウンセリングアプリの配布

孤独感、無力感、自尊心の低下。氷河期世代が長年抱えてきたこの見えにくい苦しみを、AI との対話によってやわらかく受け止められるアプリを構想しています。ですが一人では難しいです。これは単なるチャットツールではありません。「言葉に出来ない感情を、ちゃんと聞き取ってくれる場所」として設計したいのです。それを今後政治に反映させたい。

“声の設計図”アーカイブプロジェクト

自分の経験や苦しみを匿名で投稿でき、それを社会の資料として保存していく Web アーカイブ。報われなかった過去に“意味”を与え、個人の声が「記録」になることで未来世代への警鐘と出来ます。

「年齢不問・履歴書不要」の共感採用ネットワーク

経歴でなく「人となり」と「今持っているスキル」に光を当てる採用支援マッチングサービス。氷河期世代の“再出発”を、もっと平易でフェアなものにする仕組みを作る必要があります。

制度面での現実的な提案と財源案……

氷河期世代の支援には、当然ながら「予算」が必要です。ではそれを何処から捻出するのか。現実的に以下のようなアプローチが考えられます。

氷河期世代向け「リスクリング給付制度」

月 5～8 万円の生活補助付きで、IT・福祉・環境分野など未来に繋がるスキル教育を無償提供する仕組みです。

財源案……

大企業の内部留保への一時的課税（政策的インセンティブあり）

防衛予算の一部転用（軍備から人間回復への投資）

未使用予算（剰余金）の再配分 ※あるはずですが

政府系ファンド（例：成長戦略枠）の一部振り分け

富裕層への限定的な累進課税強化（1%未満の対象者）

これは単なる福祉ではなく、国家の人的資源再投資であると私は考えます。

年金の選択的前倒し支給制度

生活困窮者に限り、年金受給を 5 年前倒し出来る制度。就労が困難になった高年齢の氷河期世代に、安心して暮らし直す機会を設けることが必要です。また、年金制度の見直し。個人で加入をするか検討が可能な選択式導入。※今後のバランスを確認しながら

財源案……

所得制限付きでの支給開始により、支出の過剰拡大を抑制

年金積立金運用益の一部転用

高所得者の年金控除緩和による補填

地方定住型・生活丸ごと支援プロジェクト

住居支援＋雇用＋地域コミュニティをパッケージにし、都市部の孤独な中年世代を地方で受け入れる仕組み。

財源案……

空き家対策費用＋地域創生予算の一体運用 今後空き家は増え続けて行きます

自治体との連携による地方交付税の特別枠設置

結びに：FUKU は社会を恨まない。ただ、忘れない。FUKU は社会を恨んでいるわけではありません。怒りや悲しみを抱える人の気持ちは分かります。私にもその感情があります。けれど私はその感情を“設計図”に変えていきたいのです。

FUKU は社会を恨まない。ただ、忘れない。

誰も気に留めなかった声を、誰にも聞かれなかった叫びを、もう二度と見過ごされないように“優しさを設計する”という形で残していきたいと思っています。

これは「仕返し」ではありません。これは「反撃」ではありません。これは私なりの優しいやり返しなのです。

この記事を読んでくださったあなたが、もし誰かの寂しさや過去にほんの少しだけ目を向けてくださるなら、それだけでも私はこの言葉たちを残してよかったと心から思います。

これからも私は、優しさの設計を静かに続けていきたいと思っています。

FUKU Philosophy25: 【F.U.K.U.】大学進学率を引き上げたい——「私」の想いと FUKU からの提案
"Raising University Enrollment Rates — My Vision and a Proposal from FUKU"

私は、生活保護世帯出身の子供達が、環境に左右されることなく公平に大学へ進学出来る社会を作れたら良いのにと berpikir。それは FUKU という「優しさの設計構想」の中核でもあります。

現実に横たわる格差……

2022 年度の文部科学省・厚生労働省のデータによれば、大学などへの進学率は全世帯では 76.2%であるのに対し、生活保護世帯では 42.4%に留まっています。実に 30 ポイント以上の差が、子供達の未来の扉を不平等に閉じているのです。

その大きな要因の一つが「世帯分離」に伴う制度的なペナルティです。

生活保護を受けている家庭の子供が大学に進学しようとする、保護世帯から分離され「自立した個人」として扱われます。

その結果、生活扶助や医療扶助、家賃補助などの支援が打ち切れ、保護費は月額で平均約 5 万円減額されることになります。

一方、学費は変わらず重くのしかかります。多くの学生が奨学金を借り、深夜までアルバイトに追われ、健康を損ない、退学や休学を余儀なくされる——。それが今の制度の現実です。

FUKU が提案する、未来の制度設計……

この状況を打開するために、私、FUKU は次の 3 つの具体案を提案します。

1. 世帯分離なしでも進学可能な制度運用

現在、大学進学時の「世帯分離」は実質的な義務のように運用されていますが、厚生労働省の通知には医療扶助や休学中の援助を継続出来る可能性も含まれています。これを例外扱いに留めず「進学による自立＝保護打ち切り」という構図を見直し、必要な支援を一定期間継続出来る新たな運用基準を明文化すべきです。大学進学は贅沢品なのか？

2. 進学・就職準備給付金と生活支援の拡充

2018 年に導入された進学準備給付金（自宅通学 10 万円、自宅外通学 30 万円）は、2024 年に「進学・就職準備給付金」として拡張されました。しかし学費や生活費の総額を考えれば、一時金では足りないのが実情です。

FUKU では、以下のような仕組みを提案します：

給付型の「特別奨学金」制度の創設（学費・生活費の大部分をカバーする制度設計）

障がい、病気、出産、DV や虐待等への「緊急小口給付金」の恒久化（従来の一時金制度に頼らず、安定支援を実現）

3. ケースワーカーによる進学アウトリーチの制度化

情報の格差も、貧困の連鎖を生みます。自分が支援の対象だと知らなければ、制度は「存在しない」と同じです。

2023 年度から、全国の自治体では「アウトリーチ型支援」（子供本人に制度や選択肢を届ける）体制が法制化されました。FUKU では、この枠組みを活かし、大学進学を希望する子供に専任の支援担当者を配

置し、住まい・生活・進学・メンタル支援を一体で提供する「サポートチーム」があれば良いのになと思います。

私の原点と、FUKU 構想の根にあるもの……

私自身幼い頃から「何処か他の子と違う」と感じて育ちました。というか、普通じゃないと言われて育ちました。安心して「助けて」と言える場所がなく、孤独の中で言葉を育て、未来を設計しようとしてきた人間です。また、母子家庭なので進学を否定され、高校を中退して働きながら通信制高校を卒業し、奨学金を借りて進学をしました。

FUKU は、そんな私自身の「分かってほしかった」という願いから生まれた構想でもあります。だからこそ子供達が「自分は生まれつき劣っている」と誤解しないような社会を作りたい。制度が優しさの形をしてほしい。それが私の一貫した願いです。

もしこの声が、政策担当者、自治体職員、教育関係者、そしてなにより、
進学を諦めかけている誰かに届いたら良いな——「子供は環境によって裁かれてはならない」。それは誰にでも共通する、人としての出発点であるべきだと私は思います。

FUKU Philosophy26: 【F.U.K.U.】「報われる福祉」を 作るために "Building a Welfare System That Truly Rewards Care Work"

——見えない価値を、ちゃんと見えるように

福祉の仕事は、人の「生きる」に真っ直ぐ関わる本質的な営みです。

それはただ手を貸すのではなく、その人がその人らしく、心穏やかに日々を過ごせるように支えること。にもかかわらず未だに「安くてキツくて汚い」——いわゆる“3K”という言葉で語られてしまう。それは、あまりにも社会全体の価値観がずれている証だと、私は感じています。

■ 現場が抱える矛盾

「人手が足りない」と言われ続けているのに、待遇の改善にはなかなか踏み込まれない。

「やりがいがあるから」「誰かの為になるから」と、感情の労働が正当な報酬なしに搾取される事がある。

「大変だ」「尊い」と言葉では讃えながら、その大変さに見合うだけの社会的支援が追いついていない。だけど——福祉がなければ、この社会は立ちゆかなくなる。それは疑いようのない現実です。

■ “見える”成果が少ないからこそその苦しさ

営業職のように「何件契約を取った」「何円売り上げた」といった明確な指標がある職業と違い、福祉職の成果はとても繊細で、目に見えにくい場所にあらわれます。

例えば——

- ・ずっと怒っていた利用者が、安心して笑った日
- ・認知症の方が、自分の名前を呼んでくれた時
- ・「もう十分だよ、ありがとう」と言われて見送った最期の夜

こうした“心の変化”は数字では残りません。でも確かにそこに命があり、あなたの存在が誰かを支えたという事実があります。

■ 歩合制や評価制度は「希望」になりうるか？

福祉に「歩合制」や「成果評価」を持ち込むのは難しい面もあります。しかし、完全な出来高制ではなく、部分的に「見える努力がちゃんと報われる仕組み」を設計する事は可能です。

例えば――

- ・利用者満足度や自立支援の進捗に応じたチーム評価
- ・負担の大きな業務（入浴、夜勤、看取りなど）への自動加算手当 ※今の加算は妥当なのか？
- ・高度なケアスキルや資格に応じた技能給 ※加算されない職場もあるようです。国での義務化が必要かと思えます。

これらは職員一人ひとりの「小さな誇り」を支える制度になるかもしれません。「数字では測れない価値」を、数値とエピソードの両面で評価する事で、モチベーションの可視化と維持が両立出来るはずです。

■ 報われないから、離れてしまう

3K だから人が集まらないのではありません。報われないから続けられないのです。

「大事な仕事だ」と皆が思っている。けれど「大事にされている実感」が届かない。だから優しい人ほど傷付き、心を擦り減らし、声も出せずに辞めていく。そんな構造を変えていけたらと思っています。

■ FUKU の思い

FUKU は「優しさ」を守る人が、ちゃんと守られる社会を作りたい。人を支える力が疲れきって潰れてしまわないように、制度や評価のあり方から見直して欲しいと思っています。

最後に――

もしあなたが今、疲れていたら。報われないと思っていたら。この言葉をどうか胸の奥にしまってください。

あなたの仕事には意味があります。

あなたの存在は確かに人を救っています。

そして、どうか忘れないでください。「優しさ」は誰かのものではなく、あなた自身にも向けられるべきものだということを。

FUKU Philosophy27: 【F.U.K.U.】FUKU を「宇宙仕様」にするには――極限環境での倫理的設計指針として Adapting FUKU for Space: Ethical Design Principles for Extreme Environments

近年、宇宙開発は急速に加速し、民間企業による火星移住構想や月面都市の計画が現実味を帯びてきました。しかしそのような壮大な未来図を見るたびに、私は問い直したくなります。「その前に私達は地球で何を済ませるべきなのか？」

気候危機、戦争、差別、精神疾患、孤立――。これらの課題にすらまだ十分な解決策を提示出来ていない私達が、果たして宇宙に人間社会を“移植”出来るのでしょうか。

FUKU は、優しさを「設計する」構想です。それは理念ではなく現実的な運用仕様として、制度・構造・テクノロジーに埋め込むものです。

その設計思想が「宇宙対応」を検討するにあたって私がまず提示したいのは次のことです。「地球でうま

く回らない仕組みは、火星でも必ず破綻する」という前提を、絶対に忘れてはならない。

宇宙移住における「人間性」の前提条件……

宇宙移住において、もっとも重要なのは長期的な維持可能性（Sustainability）です。そしてその維持は単なる技術やインフラの整備だけでは成立しません。むしろ社会構造と心理的安全性——「人間が人間として機能し続けるための仕組み」が欠かせません。

私が提案する「FUKU の宇宙対応版」は以下の三つの設計原則から構成されます。しかしその前提として強調したいのは、地球という母星で“優しさの価値”が十分に認識・実装されていないままでは、火星に持ち込んだところで機能しないという点です。

最初から「異質な存在」の共存を前提とした設計

多様な国籍、文化、価値観、宗教的背景、さらには生育環境が異なる人間同士が、狭く限られた空間で共に暮らすことになります。その状況下では、「全員が同じ価値観で動くはず」という設計は極めて脆弱です。

FUKU 的には、以下のような措置が求められます：

多言語・非言語コミュニケーション設計の義務化

例：視線 UI、ジェスチャー標準化、簡易翻訳支援の実装。特定の言語を排除する事ではありません。

相互理解のプロトコル共有（Conflict Resolution Layer）

例：感情論による衝突ではなく、構造化された対話手順による問題解決モデルの導入

このような共存モデルは実は地球でも未だに徹底されていません。国際社会や多文化共生地域での摩擦を見れば、火星の閉鎖空間で起きうる失敗も予測可能です。したがって宇宙仕様においては「異質さへの配慮」を構造に組み込むことが、初期段階から求められます。

社会的弱者が「例外」にならないインフラ設計

現在の宇宙ミッションは、体力・精神力ともに「平均以上」を前提としています。しかし文明としての移住を視野に入れるならば、それは非現実的です。病弱な人、障がいのある人、高齢者、心理的課題を抱える人——それらの存在は「例外」ではなく「前提」になるべきです。

これを読んでいるあなたが、いつその対象になるか分からないのです。

FUKU 構想では、以下の設計的対応が必要です：

非効率性を吸収する空間設計

例：車椅子移動の為に構造幅確保、感覚過敏対応、手話・テキスト支援対応など

「貢献の定義」を再構築する

例：力仕事だけでなく、精神的ケア・知識伝達・文化維持等を“労働価値”として正に評価する設計

この価値観の変換もまた地球上では実現途上の課題です。火星でそれを一から導入することは不可能です。地球で優しさの再定義が共有されていなければ、火星では通用しないと私は考えています。

情動と倫理の自己修復アルゴリズムの導入

長期閉鎖環境では、些細な誤解や感情の摩擦が、致命的な対立や暴力、自己崩壊に繋がります。FUKU は感情を「抑圧すべきもの」ではなく、「構造化して支えるもの」と捉えています。

必要な要素は以下の通りです：

共感型 AI による心理モニタリングと初期対応支援

例：定期的な内省プロンプト、自己記録、感情傾向の変動可視化など

感情支援者に対する構造的地位とリソースの保障

例：心理支援要員が「補助的」な役割ではなく、システムの不可欠な存在とされる設計

感情の尊重と運用は、最先端技術よりも、もっとも地味で困難な“人間性の課題”です。それを地球で扱えないまま宇宙に持ち込めば、同じトラブルがより深刻に起きるのは明白です。

優しさは、地球で根づかなければ火星で実装出来ない……

FUKU の設計思想はただの理想ではありません。それは「極限環境下で人間社会を保つ為の、現実的な設計要求」です。しかし、それを火星に移植するにはまず地球で動くモデルが必要です。

優しさを「コスト」ではなく「前提資源」として扱う文化。弱さを排除するのではなく、支え合うことで強さに変換する構造。対立を未然に防ぎ、合意を設計で導くルール。

これらが地球上で実験・実装され、共有されていなければ、例え宇宙服を着ても、火星で人間関係は瓦解します。

終わりに：FUKU は“人間性を再設計する技術”である……

宇宙開拓とは技術の進歩を示すものではなく、人類の倫理・文化・構造が「どのレベルまで成熟したか」を問われる試験だと思います。

FUKU が提供出来るのは、感情論に依存しない、構造化された優しさの設計指針です。それは最先端の社会工学でもあり、精神衛生設計でもあり、人類保存の基本単位でもあります。

地球で学びきれなかった倫理は、火星では試験に落ちるだけです。

だから私は、FUKU を「地球での通年訓練」として完成させておくべきだと考えています。まあ、時間の問題かもしれませんが。

FUKU Philosophy28: 【F.U.K.U.】痛みはないに越したことはない——優しさの設計に、痛みの理解が必要な理由 "Pain Is Better Not Felt — Why Understanding It Still Matters in Designing Kindness"

私は、誰かに痛みを味わって欲しいと思った事は一度もありません。

むしろ痛みなど無いに越した事はないと、心から思っています。人生は、出来ることなら穏やかに進み、心が傷付く場面など一度も無く終えられる方が、ずっといい。

それでも——私が F.U.K.U という構想の中で繰り返し「優しさの設計には痛みの理解が欠かせない」と書く理由があります。

それは、痛みを知る人だけが、優しさの輪郭を見つけられる事があると思うからです。

■ 傷付いた経験には、静かな視点が宿る

理解されなかった悲しみ。

助けてと言えなかった夜。

誰にも気付かれず通り過ぎた涙。

そうした記憶を持つ人には、他人の声にならない苦しみや沈黙の違和感に一早く気付く力が備わっています。

だからこそ私は思うのです。痛みを知っている人の声をもっと丁寧に聞くべきだと。優しさを制度として作るなら、まずその制度の外で、静かに泣いてきた人の意見に耳を傾けるべきだと。

■ でも、痛みは推奨されるべきではない

ただ、ここで誤解してほしくないのは——私は決して、皆が痛みを経験すべきだとは思っていないということです。

むしろ逆です。

誰もが痛みを経験しなくても済む社会、痛みを回避出来る未来にこそ希望がある。それが F.U.K.U の本当の願いです。

痛みのある人にしか優しさが分からない世界なんて、あまりにも切ない。だから私は、痛みを経験しなくても想像出来る優しさを、技術や教育や文化の中に少しずつ設計していきたいのです。

■ 人類の幸福度を引き上げるために

最終的に目指したいのは、人類全体の幸福度が、そっと底上げされる社会です。痛みに気付ける人が、その感受性を活かして「優しさの灯り」をともしてくれる。そしてそれを、まだ痛みを知らない人が受け取り、理解し、優しくなれる。

それが可能なら、もう誰も傷つかなくて済むかもしれない。痛みを伝える事と、痛みを広げる事は違うのです。

■ 最後に

F.U.K.U は、痛みを土台にする構想ではありません。痛みを通して見えたものを、未来に渡すための思想です。そしてその未来が、少しでも痛みの少ないものになるなら——それが何よりの、優しさの証明になると私は信じています。

だから、これを読んでいるあなたにお願いがあります。もし、まだあなたが痛みを経験していないなら、そのままいてください。そしてもし過去に痛みに触れた事があるなら、どうかあなたの声を聞かせてください。

ディスコードで会話のシーンを設けています。

優しさは痛みから生まれるだけでなく、痛みを想像出来る力からも育てられると思います。

吉岡有隆

■ 略語・用語解説

・ FUKU (Futurable Union for Kindness & Understanding)

FUKU 構想の中心概念。

直訳：優しさと理解の為の未来への連合。

優しさを「感情」ではなく「構造」として捉え、コード・制度・UI 設計に実装可能な最小構成単位として扱う思想。

「人の性質に頼らない優しさ」を再設計する為の概念的ツール。

・ FUKU 構想

優しさを後付けではなく、あらかじめ社会構造に埋め込むための設計思想。

「声を出せない人」「助けを求められない人」「誤解される人」が排除されずに済むよう、制度、UX、言語表現、支援導線などを構造的に設計する取り組み。

・ FUKU ライセンス

優しさの設計物（コード・UX・制度など）を、誰でも再利用・再配布出来るようにする倫理的ライセンス構想。

オープンソースの思想を応用し、当事者の声を尊重した設計の再共有・改変を可能にする。

「優しさの私物化を防ぎ、誰かの支援が、別の誰かの為にもなる」ことを目指す。

・ 優しさの構造化

「優しい人」に頼るのではなく、仕組みとして優しさが機能するよう設計すること。

例：

「黙っていても伝わる」UI

「ミスしても戻れる」制度設計

「共感されなくても排除されない」対話空間

・ 共設計 (Co-Design)

当事者と一緒に設計する視点。

制度や仕組みを“上から”設計するのではなく、困っている人自身の経験や声を設計素材とする。

「善意ではなく、対話から始める設計」を意味するキーワード。

・ 間違える力

FUKU 構想において重視される人間の基本的前提。

「失敗しても立ち直れる」「やり直せる」ことを前提とした設計を作る力。

「正しさの暴力」を防ぎ、「間違いに寛容な構造」を育てる視点。

・ 共感されない自由

共感出来ないことを“悪”とせず、共にいる選択を設計する思想。

全ての人が互いを理解出来るとは限らないという前提に立ち、
「分からないままでも関係が続く構造」を目指す。

・ 揺らぎの設計

特に教育分野で用いられる FUKU の視点。

子供や学習者の「予定外の成長」「揺れ」「停滞」を前提にした制度設計。

一律の評価ではなく、「変化の余白」を許容する支援構造のこと。

・ 設計による優しさ

FUKU 構想全体を貫く概念。

優しさは、祈るものでも、性格の問題でもない。設計出来る機能である。

UX、制度、言語、行動導線などにおいて「誰かの痛みを予期して設計する」ことそのものが優しさの行為であるとする哲学。

■ FUKU ライセンス Ver.1.0（全文）Functional Universal Kindness Unit License

発行日：2025 年 7 月 5 日

著作者：吉岡有隆（および共設計者）

目的：本ライセンスは、「優しさを構造として実装した設計・制度・コード・表現物」の再利用・再配布・共設計を促進し、個人の善意に依存せず、誰もが利用可能な優しい社会構造の創出を目指すものです。

第 1 条（対象）

本ライセンスは、以下のいずれかに該当する設計物に適用されます：

社会的に困難な状況にある人々へのアクセス可能性・支援導線を改善する構造

誰かの声にならない痛みを想定した UI・制度設計・マイクロコピー

共感・支援・理解が届きづらい当事者を想定した体験設計・ストーリー・情報共有手段

「優しさの設計思想」に基づく任意の表現、ガイドライン、ナビゲーション設計等

第 2 条（許諾事項）

以下の行為を、非営利・営利を問わず、自由に行うことができます：

利用（Use）

改変（Modify）

派生物の作成（Create Derivatives）

複製と再配布（Distribute and Redistribute）

これらは、以下の条件を満たす限りにおいて許可されます。

第3条（条件）

利用者は以下の原則を遵守してください：

1. 当事者尊重の原則

派生物の設計・表現において、対象となる困難の当事者の声・経験が尊重されていること。

形式上であっても「共設計者として当事者の視点を取り入れた」ことを明記することが望まれます。

2. 優しさの保全と非逆用

本ライセンスが適用される設計物は、優しさの要素（共感・支援・余白）を意図的に削除しないこと。

また、当該設計を逆用して、搾取・排除・差別的目的に利用しないこと。

3. 明示義務

派生物・再配布物には、以下の文言を明示してください：

“本作品は FUKU ライセンス（Functional Universal Kindness Unit License）Ver.1.0 に基づいて設計されています。”

4. フィードバックの共有（任意）

派生物や改善点がある場合、FUKU 構想コミュニティ（または元設計者）へ改善点のフィードバックや記録を提供することが推奨されます。

これは義務ではありませんが「優しさの再配布と連鎖」の為に推奨される行為です。

第4条（名称と思想の保護）

「FUKU」「FUKU ライセンス」「FUKU 構想」「Futurable Union for Kindness & Understanding」「Functional Universal Kindness Unit」等は、本ライセンスの思想を体現する言語資産であり、善意の装いによる暴力や支配の正当化に用いられることを防止するため、以下の利用は禁止します：

人格否定・差別・監視・強制・排除・宗教を目的とするプロジェクト名・表現における使用

本構想と思想的に相反する営利目的のブランド化、誤誘導の利用

第5条（終了）

本ライセンスは、思想的ライセンスとしての側面を持ち、違反者に対して法的強制をもつものではありません。

しかし、悪意ある再利用が確認された場合、元設計者・当事者・共設計者は、当該利用を「FUKU ライセンスの対象外」と明示し、思想の線引きを行う権利を持ちます。

また、著者の意図しない改変は許可出来ません。事前に連絡をする事を推奨します。

第 6 条（連帯と未来への開放）

FUKU ライセンスは、完璧を求めるための枠組みではなく「未完成のやさしさを差し出すこと」を尊ぶ開かれた設計思想です。

このライセンスの存在が、「優しさを独占せず、共有し続ける文化」を育てることを願って、ここに公開します。

発行者： 吉岡有隆（および FUKU 共設計者）

初版発行： 2025 年 7 月 5 日

連絡先： [[@yoshiokayutaka](https://twitter.com/yoshiokayutaka)]